
アイブ

伊恩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイブ

【Nコード】

N4423E

【作者名】

伊恩

【あらすじ】

『大切な人』に生きて欲しい。例え君が俺のことを忘れてしまっても、この世界から俺の存在がなくなってしまうとしても。俺は見守っているだけでいい。そんな人たちの集まり、アイブ。これはそんなアイブになった2人の物語。

第1話 発端（前書き）

さて、これから一組の少年たちの物語が始まります。

これは自分が6年前に原案を思いついた初めて自分で考えた話です。

こんな未熟な自分の作品に目を通していただけるなんて感激です。

そして、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

第1話 発端

アイブとは、魔物に大切な人を殺され、自分の命と地上の自分に関する記憶を代価に大切な人の蘇生を行った者たちである。

従ってアイブとなった人間のことは地上に生きる全ての生物の記憶や、記録から全て完璧に抹消される。

それは蘇生した大切な人の記憶も例外ではない。

それでは命を懸ける意味がないと思うかもしれない。

だが、それを望む人々もいる。

皆に忘れられようとも、自分が存在しなかったことになるうとも。

大切な人が生き返れるのならば…。

そんな自己犠牲を厭わなかった人々は黒い翼を持ち、こう呼ばれる。

『アイブ』と

第1話 発端

天界とは空中に浮いた幾つかの島のことを言う。

この2人はアイブの支所のある、天界の中でも一際小さな島にいた。黒い長髪を風になびかせる16歳の少年、ケイは散歩道として整備された島の岬の美しい手すりにもたれかかり、足元に広がる景色を見つめている。

足元に広がるのはマリンブルーの美しい海と白い砂浜…などではなく、真っ白な雲の塊ばかりである。

この岬はかなりの長さがあり、ここに来るには大変な時間がかかるため、ケイとその相棒との2人だけの場所として、独占することができる。

今は怖い相棒もおらず、本当にケイだけが、それなりの広さがある岬のスペースと天国のようなパノラマを独占している。

その天国のような景色が目染みたのか、心に染みたのか。

ケイは泣きこそはしないが、目を潤ませる。

この少年の心にはぽっかりと穴が開いている。

それが顔にも表れたのだろう。

この顔だけを見知らぬ人が見たら『両親でも亡くしたんだろうか』なんて思ってしまう様な悲しい顔をしている。

ケイは、妹である明日奈という少女を生き返らせるために自分の存在を消したアイブである。

そんな決意を持つには若すぎると思うかもしれないが、アイブになる資格は年齢が10代の人間にしかいないため、14歳の時にアイブになったケイは特別若かった訳ではないのだ。

アイブになって2年、ケイは一度も妹に会ってはいない。

会いたいのは山々なのだが、ケイの祖国である日本と言う国は魔物などがあまり出没せず、平和なため、任務の地としては滅多に名前が挙がらないのだ。

仕事以外で地上に降りられないと言うのは不便この上ない。

それに、アイブや魔物は特殊な術を使わない限り、人間には姿を見られないのだ。

元々サボリ癖があるケイはその術を習得していないので、今のケイでは直接会って話すことはできず、ただ相手の姿を見ることがしかできない。

どうせ日本行きの任務など来ないのだから…とと思って術の修行もせず、ただ故郷や妹に思いをさせているのがケイの今の状況だ。

後ろから誰かが歩いてきたのにも気づかないほどに集中しているケ

イは、小さく呟く。

「明日奈…元気かなあ……………」

「ケイ!!」

このケイに後ろから話しける少年こそケイの言う怖い相棒、ユウだ。

ユウは誰にでも聞こえるような大きく、ハッキリとした口調で言う。

だがそんなことはお構いなし、ケイはユウに見向きもせず、独り言を続ける。

「みんな本当に俺のこと忘れちゃったのか…」

ケイはアイブになる前の日々の思い出にどっぷり浸かってしまっている。

その証拠に、目が死んだ魚のようになっており、焦点が定まっていない。

そんなケイにユウはもう一度声をかける。

「ケイ!!」

ユウはさっきよりも大きな声…叫びに近いもので相棒の名を呼んだが、当の本人は全く聞いていないようだ。

「みんなに…明日奈に会いたいなあ……………」

ユウはお世辞にも気の長い方ではない。案の定もう頭に血が上ってきている。

「このうっすらトンカチ！人の話をききやがれっっ！！」

ユウはついに怒りだして持っていたファイルで力いっぱいケイを殴りつけた。

この少年、一見小柄で少女の様な容姿の持ち主なのだが、すごい馬鹿力の持ち主でもある。

「痛っっ！！！」

こうして、ユウの声はやっとケイに届いた。

無論、痛みと言う悲しい代償つきだが。

「…え、あ。ユウ！！ごめん！！考え事してたもんだから…」

ケイはユウの緋色の瞳をみつめながら必死に謝る。

ユウの瞳は怒りで白目が赤くなっているわけではない。

虹彩が真紅の赤色なのである。

ユウはアイブになってから記憶喪失になったと言う悲しい経歴の持ち主だ。

だから記憶喪失になる以前の記憶は全く無く、自分の出身国も大切な人も分からないのだ。

ケイは柄にも無く、しばらくユウの美しい瞳に見入ってしまった。

これがユウではなく、普通の少年だったならばケイは絶対に見入ったりはしないが、本当にユウは容姿が良く、誰が見とれてもおかしくないほどののだ。

だが、それを中断したのは瞳の持ち主だった。

「…？ケイ、仕事だ！！さっさとしろ、置いてくぞ！！」

ケイにじっと見られてたので、自分の顔に何か付いていると思っただけらしく、ユウは洋服の袖で自分の顔を拭いながら言う。

こんな行動を取られると、なんだか自分が悪いことをしてしまったかのように思い、ケイは少し申し訳ない気持ちになった。

「ああ・・・わかった、わかった。今日はどこの国だ？」

申し訳ないとは思っていても、ケイはさっきユウにファイルで殴られたケイは忘れてはいない。

従って少し不機嫌である。

アイブはワープの術が使えるので、世界中の任務がこの2人にも回ってくるのだ。

前の任務はアラスカで、2人とも寒さで死にかけた。

もうあんな目に合うのは真っ平ごめんなので、ケイは少なくともと

凍死など絶対しない暖かい地域を心のなかで望んでいた。

だが、返ってきた相棒の言葉に、気候のことなんて一気に頭から飛んで言ってしまった。

「おまえの祖国、日本だ。」

「日本・・・？」

ケイは半信半疑に聞き返した。

それは紛れも無く一日も忘れたことなど無かった祖国の名だが、なんだか聞いたことのない魔法の言葉のようにケイには聞こえた。

ユウはそれを聞いて軽くうなずいてから微笑する。

「そう、日本だよ。なんだ、まだぼーっとしてるのか？」

ケイは今、辛うじて美少年の部類に入る顔が台無しになる、なんとも間抜けな顔をしているが、それに劣らず声も間抜けになってしまっている。

「会えるのか？明日奈に・・・」

ケイは口の開いた間抜け顔のまま首を傾げる。

「ああ・・・でもアレを会

」

「ユウ！！早く行こうっ！！！！」

ユウの言葉を上からかき消すようにケイが叫ぶ。

さっきの間抜け顔はどこへやら。花も顔負けの恐ろしいほど明るい笑顔を浮かべている。

表情がころころ変わってしまうのがこのケイと言う少年なのだ。

話をすることはできないとはいえ、ひと目でも妹を見ることができればケイは十分幸せなのである。

「こらっ、人の話を最後まで聞け!!」

だがケイは全く聞いていない。

ケイは考え事を始めると人の話しを全く聞かなくなると言う酷い癖がある。

最初にユウと呼ばれても気づかなかったのはその為だ。

決してユウを無視していたわけではなく、本当にケイの耳には届いていなかったただけなのだ。

ユウはケイに対しては特に短気なため、この癖を極度に嫌っているが。

このとき、二人はこの仕事が運命を大きく変える仕事になることになるとは知るはずもなかった。

第2話 運命の任務

2話 運命の任務

ケイに急かされて、2人はアレから5分で出発と言う記録的な速さで出発する羽目になった。

ケイが術を発動されるため、ルーンを超つ早で詠唱する。この詠唱速度もアイブ史上でも指5本に入る速さだったかもしれない。

それから、日本の雲の上にある天界の島までワープした。

ワープの術は島と島の間でしか使うことができないのだ。

そして、その後はアイブの持つ翼で飛んで移動し、ケイは方向感覚抜群のユウについていった。

ケイは任務に出るときはいつも機嫌が頗る良い。アイブは任務のとき以外には地上に降りてはならないのだ。

逆に言うと、任務の時は地上に降りられる。それだけがアイブたちの唯一の心の支えだ。

他にもいろいろと掟があるが、掟を破つたら最悪の場合、この世から消されてしまうかもしれない。それは即ち消滅、『死』と同義語である。

今日のケイはいつもとは一味違い、恐ろしいほど機嫌が良く、ユウが気持ち悪いと思うほどの満面の笑みを終始浮かべ続けている。

無理も無い。今回の任務を終えればその足で妹と2年ぶりに再会することができるのだ。

2人が渋谷の上空あたりに来たときだ。

ユウが何も言わず急降下していった。

ケイの目の前にユウの純白の羽がゆっくりと落ちてきた。

アイブの翼は通常黒だ。

だが、なぜかユウだけが純白の翼を持っており、おまけには銀色の髪に紅い目と言う風貌だ。

これらの理由でユウはアイブの間で迫害の対象になっている。

まあ、相棒のケイは全然気にしていないのだが。

ユウの話はさておき、今回の任務は魔物の駆除だ。

ユウは標的の魔物を見つけたに違いない。

そう思ったケイは、ユウに続いて長い黒髪をなびかせながら急降下した。

30秒後、ケイはユウの後を追って着陸する。

優しく春風がケイの長い髪を乱す。前の任務から暖かい地域を望んでいたケイにとっては、利になかった気候だ。

だが、臭いで全てが台無しだ。ガスやら生ごみやらの恐ろしい臭いが春風に乗ってぶんぶんしてくる。

溝の臭いを100倍濃いくした臭いとも言えいいのか。

ここは渋谷の路地だ。昼間だと言うのにビルの間のため、とても薄暗い。

路地にしては広さがあり、路地を抜けたらすぐ渋谷のメインストリートに出るようになってる。

ケイはメインストリートを見る。

ケイは東京出身なので、アイブになる前ここは彼にとって庭のようなものだった。

感動やら悲しみやらで胸を一杯にしたケイはゆっくりと口を開く。

「ただいま…日本…もうあれから2年も経つのか…」

また考え事を始めようとしているケイを先制して、相棒の背中をユウは容赦なく、力一杯平手で殴った。

「っ!!…!…そうだっ!!魔物はどこに居るんだ!？」

ケイは懸命に痛みを堪えるが顔に出ている。

「あそこだ」

ユウは薄く不敵な笑みを浮かべている。

「！」

ケイは腰を抜かすほど驚いた。

本当に腰を抜かしたらユウに笑われるのがおちなので足に力を入れてどうにか踏ん張ったが。

そこには想像をはるかに超えた大きさの黒い龍が悠々と暗い路地の空中を泳いでいたのだ。

この路地はかなり大きさがあるのだが、それでもこの龍には狭いようだ。

蛇のような体をくねらせて狭そうに空を泳いでいる。

この龍がもし隣にある超高層ビルを壊そうと思えば、巻きついたならば、豆腐より簡単に崩れてしまうに違いない。

「こっ、こっ、こいつらよく平気でここを歩けるよな!？」

ケイは龍の周りを平然と歩いている人間を指差しながら言った。

路地とはいえ道幅は人5人が肩を並べて歩けるほどの広さがある。

しかもメインストリートに通じているので、それなりに人通りがあるのだ。

実際生前(?)ケイも人ごみを通らずすぐにメインストリートに出

れるのが便利だったので、しばしばここを通っていた。

アイブも魔物も人間には見えないのだから仕方ないのだろうが、それでも龍を無視して楽しそうに歩いている人々に違和感を感じられずにはいられなかったのだ。

「仕方ないだろ。人間には魔物も、俺たち（アイブ）も全く視えな
いんだから」

『お前そんなことも覚えてないのか？』とでも言つぷつにユウは冷
やかに返してきた。

『それぐらい俺でも知ってるっつーのっつー！！』といつもなら真っ
先に叫けぶが、さすがに凶暴な魔物の前でそんなのんきな会話をす
る勇気も度胸もケイには無い。

「…でこの龍を駆除するのが今回の任務。ってわけか？」

ケイはユウの冷静さを見て少し落ち着いて言う。

ケイも年頃の少年であり、しかも人一倍見栄っ張りである。

『自分だけ取り乱してたらなんかかつこ悪いじゃん！』と言つぷ気持
ちが強いのだ。

「まっ、そう言うことだ」

ユウはあっさり答えた。

このでかさの龍を前にしても世間話をしているときとなんら変わら

ない声色。

いつもこの神経の図太さには驚嘆させられる。

ケイは正直にユウに聞いてみることにした。

ぶっちゃけると、ケイはこの龍むちゃくちゃおっかない。

「む、無理に決まってるよな!？」

ケイは無理に笑顔を作るが、完璧に強張っている。

ユウは不敵な微笑のまま薄暗い路地の壁にもたれかかり、ゆっくり腕を組んだ。

「お前が無理でも俺にはできる。」

ユウ自信満々は声でケイをからかっているとしか思えない。

こういう挑発がケイには1番効くことをユウはよく知っているのだ。

「なっ、ユウにできるなら俺にだってできるさ!」

ユウの予想どおりケイはやけになってる。

「じゃあ早速そのヤル気を生かして龍をを戦っても被害が出ないところまで追い込むのを手伝ってくれ!」

ケイの意地につけ込む所がユウの意地悪なところである。

誘導尋問の類はユウの得意分野なのである。（特にこの単純なタイプは扱いやすい）

『うまくユウに利用されてるような…』

ケイもつくづくは分かっていたが口に出すのが恥ずかしい。

口にだすということは、ユウに顎で使われているの認めるのと同じなのだ。

そんなのはごめんなので勿論口にはださなかったが、苦い顔をして見せた。

「さつさとやるぞ！」

表情の事に触れるとケイが駄々をこねはじめそうなので、ユウは完全に無視する。

ケイが駄々をこねはじめると流石（？）のユウでも手に負えない。

ケイは、黙って鞆からクロスボウと矢を取り出す。

だが、龍と比べたら矢が注射針よりも小さく思える。

それでもユウの手前、やらないわけにはいかない。

ケイの表情は相変わらずだが、クロスボウで威嚇しながら黙ってユウと2人で龍を誰も居ない山奥へと追い込んだ。

第3話 使い魔（前書き）

アイブが人間に戻る方法を教える。
そんな取引にケイとユウは…。

第3話 使い魔

3話 使い魔

ここはもう東京じゃないのかもしれない。

ケイは生まれた時からずっと東京に住んでいるが、こんな場所が東京にあるなんてケイは全く知らなかった。

龍を森の奥開けた場所まで追い込んだが、ここはそう思うほど深い森なのだ。

人々の開発の手から逃れている証拠に人工物は何一つ見受けられない。

『この辺でいいだろう』

ユウが目でケイに合図した。

ケイは小さくうなずきながら飛ぶのをやめ、翼をしまいながら詠唱を始めた。

アイブの翼はアイブ自身の意思で背中にしまつことができるのだ。

背中に吸い込まれるように翼が消えていくのは何度見てもなれない光景だが、自分の翼をしまつのはそれとは全く別である。

ユウは龍の下に下りる。

「なんだ、もうあきらめたか？ならばここがお前らの墓場だ……！」

龍が低い声で唸る。見かけ以上のすごい迫力だ。

現にケイは詠唱はやめないものの、怯えきつているのが現状だ。

反対にユウは

「それはこっちの台詞だ！」

と挑発混じりの漫画のような台詞を吐く。

『おいおい…挑発なんかするなよ、ただでも怖いのに』

ケイはビクビクしているのを表に出さないように心がける。

だが、一方のユウの中には恐怖などと言う感情の欠片も無かった。

逆に少しは楽しめそうだと言う嬉しい気持ちで胸が一杯なのだ。

龍はユウを見て、静かに笑っている…のかよくわからないが、嬉しそうにしているのは確かだ。

だが、これは正に嵐の前の静けさと言うものだった。

「そういう馬鹿は嫌いじゃないぞ。だが時には命取りになることも覚えておけ！」

『おけ！』のあたりで龍は激しい灼熱のブレスを吐き出し

た。

熱っ、と思ったのもつかの間、そのブレスが真っ直ぐユウに向かっているのを見たときは逆に体温が一気に下がったように感じた。

ブレスはユウに当たった：様にケイには見えた。

自分は叫んで詠唱をやめてしまうかと思っていたが、不思議と心配は無かった。

ユウと組んで2年が経つが、こんなに簡単にユウが死ぬわけ無いことを本能は知っていたらしい。

予想通り、音にできないような高笑いをしている龍の前に突如、黒い影が躍り出た。

黒い影は風を斬ったような音を立てたが、ケイには何をしたのか全く分からない。

だが、その瞬間、龍の高笑いは苦痛な悲鳴に変わった。

急いで黒い影から龍に視線を戻すと、龍は左目を押さえて地面に倒れている。

そして黒い影：ユウの右手には紅い血液がついた小型のナイフが握られていた。

ケイは身震いを抑えながら思った。

『いつ動いたのか分からなかった。キャリアが違うとはいえユウと

俺は同い年なのに、こんなにも力の差があるのか…。』

ユウは相棒だが、ケイはばっちりライバル視している。

…かなり一方的なものだが。

「大口叩くな！」

ユウは脅すような声が響いた瞬間、ケイの詠唱は終わった。

「クロスチェーンっ！！」

ケイが叫んだのと同時に巨大な鎖が龍の体にきつく巻きつき、拘束した。

成功した安堵感で、ケイは尻餅をついてしまった。

空中で無傷の龍を拘束するのは至難の技だったが、そこはユウの気転でどうにかなった。

ユウが相棒の顔も見ず、無造作にケイに手を差し出す。

座り込んでいるケイは一瞬、手を取ろうとしたが、思いとどまり、自分に問いかける。

『思い出してみろっ、ユウがそんなことするたまか？』

ユウが軽く目を向けてケイに諭す。

それでやっとケイは、ユウが自分の腰にかけてある長剣を求めてい

るのだと分かった。

少し恥ずかしかったが、別にユウが何かをした訳ではないので、何も言えず、ケイは黙って差し出す。

「俺の勝ちだな」

『俺たちの訂正しろっ！』とケイは言おうとしたが、ユウの迫力に思わずたじろいだ。

と言ってもユウはケイを威圧したわけではなく、ただ龍を威圧しただけなので本人には全く悪気が無い。

ユウが紅い目で龍を威圧しながら剣を鞘から抜く。

そして龍の胸、おそらく心臓があるであろう場所に刃をむけた。

「ま、まっしてくれ！！」

龍は血だらけの右目瞑ったまま呻く。

体を大きくくねらせて、必死に鎖から逃れようとしているが無駄だ。

ケイの術、チェーンクロスの鎖が更にきつく黒龍を締め付ける。

苦しさから無意識に呻いてから龍は叫ぶ。

『馬鹿でかい声っ、そんなに叫ばなくても聞こえてるっば』

そう思ったがそんなことは叫んだ内容の驚きにかき消されてしまっ

た。

「俺はアイブが人間に戻る方法と消した存在を戻す方法を知っている！！」

「！」

ケイもユウも驚きを隠せなかった。

「人間に戻ればまた明日奈に会って普通の生活を送ることができる！！」

そんないろいろな思想がケイの頭一気にを駆け巡った。

「本当に知っているという証拠はあるのか！？」

少し取り乱しているが、無理に落ち着いた声音を作り、ユウが尋ねる。

「ああ！俺は黒龍一族の生き残りだっ、その銀髪、その強さだと上位アイブだろ？知ってるよな！？」

「！神と共に生命を造ったと言うあの黒龍一族かつ…この伝説を知っているのは 極わずかな上層部のアイブだけ…本当みたいだな…」

「

ユウは顔をしかめ、頭を掻き毟る。

黒龍一族と言うのは地上で始めて生まれた生物である。

知識の量は世界一とも言われている。

ユウはそれを知っていたのだ。

ケイとしては土下座してでも教えてもらいたいくらいの気持ちだ。

だがそんなことユウが許してくれるか…横目でユウをみて口を開く。

「ユウ…。」

「…分かってる。だが、これは魔物と取り引きしたことになるからアイブの掟では完璧に違法だ…だからと言ってこいつが黒龍だと言うことを上層部に報告したらこいつは実験体として隔離され、もう二度と聞くチャンスは訪れないぞ！…くそっ！…いつたいどうすればいいんだ！？」

もう、ぶつけようの無いもどかしさを隠そうともしない。

こんなユウは初めて見る、余程悩んでくれているのだろう。

大切な人を記憶喪失で失ってしまったユウは人間に戻ろうなどとは更々思っていないのだ。

つまりこれは全て相棒のケイのことを想って悩んでくれているのだ。

そんなユウの健気な行動に報いるためにも、ケイもなけなしの（？）知恵を絞る。

「！そうだった」

ケイが大きな声で叫ぶ。

「俺は位が低いから禁止されてるけどユウならこいつを使い魔（要するにペット）にすること許可されてるだろ!？」

ユウはしばらく『何言ってるんだ?こいつ』

と言う感じにぼかんとしていたがハツとして明るい顔をケイに向けた。

思考が追いついたみたいだ。

「その手があつたか!それならこいつをひとまず天界につれて帰れるわけだし、自分の使い魔と取引することなんて禁じられていない。それに黒龍ならば俺の使い魔にしても不足はない!!」

ユウは黒龍視線を戻すといきなり目つきも声色も鋭くなる。

「分かった黒龍。手を結ぼう。その代わりに、お前に使い魔の刻印を打ち付けるがいいか?」

「なっ!?!」

『そんなのごめんだ!ペット（奴隷）になれといっているような物じゃないか!』

黒龍はそう思ったが、ユウの握っている剣は未だ心臓に向けられている。

そしてユウの眼が『これは頼みなんかじゃない。命令だ。』と語っている。

黒龍はしぶしぶ了承した。

というか了承しなきゃ殺されるのだが。

「よし。ケイ、刻印。」

黒龍に言ったのと同じように命令口調で言っつて、剣を捨ててケイの顔も見ず、手を伸ばしてくる。

ケイは抗議しようとしたが、すかさずユウが睨みつけてきた。

『うう…こいつ、怒らせると怖いんだよなあ…』

仕方なくケイは、言うとおりショルダーバックからユウの言う刻印を取り出して渡した。

ちなみにユウは殆ど武器を持っていない。

この少年は天才少年と言われるほどの人物で、破壊力のある多彩な術が使えるので武器など無くても全く困らずに戦うことができるのだ。

その分、基本の術しか使えないケイがたくさん武器をもっている。

…だが、実際ケイ持ち物の8割がユウの武器や術の小道具なのだ。

だがケイがユウの荷物もちというわけじゃない…多分。

そんなケイの気持ちなど無視してユウは自分の二の腕ほど大きさの刻印を黒龍の首に近づけた。

バン！！

ユウは黒龍に使い魔の刻印を打ちつけた。

その瞬間、ケイがかけていた『チェーンクロス』の術が解けたのを感じた。

黒龍に打ち付けた刻印から白い煙が出て辺りを覆いつくした。

煙が晴れたときユウはへえーっという感じに黒龍を見たが、ケイはそんな落ち着いた反応をすることが出来なかった。

「な、なんだこりゃ？」

ケイは顎が抜けるほど口を開けて驚いている。

無理もない。腰を抜かすほどの大きさだった黒龍50cmほどの小さな龍になってしまったのだから。

第4話 使命

4話 使命

黒龍はユウの頭の高さを飛んでいる。

もう飛んでいるというか、漂っているようにしか見えないが。

ケイは笑いを必死で堪えながら黒龍を見ている。

「ムウ…。」

黒龍はさっきの声と同じ声とは思えないほど可愛いソプラノで唸る。

まるでヘリウムガスが変声機を使ったような声だ。

ケイは、黒龍とふたりでいろいろと話してみたが、驚くことになかなか話の分かる龍で、さっきまで敵同士だったとは思えないほどにまで意気投合した。

今日の敵は今日の仲間ってか。そう思ってケイはまたクスクス笑う。

ゆっくりと詳しく聞きたかったのであえて肝心の人間に戻る方法については触れなかった。

そのあいだ、ユウはずっと口を閉ざしている。

そのユウがやっとの事でケイに対してゆっくりと口を開いた。

「…ケイ妹に会うか？」

ユウはつぶやくようにケイに言う。

「！会えるのか！？もちろん会うさ！」

興奮してたからだろうか。

ケイは悲しい眼をしているユウに気づくことができなかった。

2人と黒龍が向かったのはケイの妹、明日奈が通う中学校だ。

中学3年生の明日奈は美しい黒髪を持った周りよりも頭1つ背の高
いかわいらしい少女だった。

あまり少女に興味を持たないユウでさえ、そのかわいらしさを認め
ざるおえなかつたくらいだ。

3階の窓から見える明日奈の姿を見てケイは思わず叫ぶ。

「明日奈っ！」

だがその声は虚しくグラウンドにこだまするだけだった。

かなりの声で叫んだので十分聞こえているはずだが明日奈は笑って
親しく少年と話している。

ケイはなぜ妹が嬉しそうに返事を返し、自分に飛びついてこないの
かが分からなかった。

いや、分かつてはいたが認めることができなかつたのだ。

ケイは窓まで飛び、窓辺の席に座っている妹の横にある窓ガラスに両手を貼り付けてる。

2人の距離は30センチもない。ケイはもう一度小声で妹の名を呼ぶ。

「明日：奈？」

追いかけて飛んできたユウは困惑するケイの肩に手を置き、話す。

「ケイ、お前の声は人間には届かないんだよ…それに分かるだろう？人間にはアイブが人間だった頃の記憶はないし、姿も見えない。お前が今味わっている虚しさが…」

「アイブたちの使命なんだよ…。」

もうケイとはかなり打ち解けていたので、ユウが言いにくいのを察した黒龍が言った。

自分の中で黒い渦が渦巻いている。

あらわしようなない悲しみ、虚しさ、嫉妬、怒り、喪失感

もう何を感じているのかも分からないっ！！

ただ全てがよい感情じゃないことだけは分かる。

こんなに近くにいるのに明日奈がとても遠い…。

長い沈黙の後、ケイはやつと言葉をしぼりだした。

「ぜ、絶対に人間に戻ってやる…っ！ケイじゃなくて黒森桂に…！」

その声は非常に濁っており、とても哀れな声に2人には聞こえた。

それから3人は天界へと帰っていった。

天界に着くまでケイはずっと泣いていたが、ユウも黒龍も知らないふりをしていた。

ケイの唯一の役目であるワープの術も全てユウが唱えた。

天界に帰ってきた3人は黒龍を服の中に隠して『渋谷の龍は討伐し、完全に消滅した。』と嘘の任務の終了を自分たちの島の支所に報告して、ケイとユウの自室に戻った。

ケイとユウは1度も眼を合わせなかったし、言葉を交わすことも無かった。

黒龍もユウの服の中であたかも黙っていることしかできなかった。

そう、自室に戻るまでは…。

「おお！おつかれさん〜久しぶりやなあ〜2人ともおー」

扉を開くとともにかん高い声が響いた。

シンプルイズベストの2人の部屋は黒と白で統一されており、モダンな雰囲気だ。

キレイ好きのユウのおかげで、いつもきれいにされている。

その誰もいないはずの部屋で1組の男女が優雅に紅茶をすすりながら机の上のクッキーを食べている。

滅多に動揺したりしないユウが口をあけてあっけらかんとしている。

ユウが驚いているにだからケイがそれ以上に驚いているのは言うまでも無い。

ユウが口をあけているのに対し、ケイは眼が泳いでいる。

「あらあ 相変わらず仲がいいのねえ。」

関西弁の男と一緒にティータイムをしている女がくすくすと笑いながら言った。

「仲がいい！？俺たちが？」

ケイとユウは顔を見合わせた。

日本から今までお互いを見ることもなく、言葉を交わしもしなかった。

第5話 戦友

5話 戦友

大声を上げて笑う2人を、謎の男女と黒龍は温かく見守る。

「ミラノ、ゼル！久しぶりだな。…で俺たちの部屋で勝手に何してるんだっ！？」

ユウはいきなり笑顔から真顔になってティータイムを続けるミラノとゼルに追求する。

ユウが凄むと凄い迫力だ。

「何って…見ての通り相棒と2人、優雅に昼下がりのティータイムを楽しんどるんや。」

「そういうことじゃなくて、なんでここにいるんだっ？それに、そのお茶もクッキーも俺のдарろ！？」

怒り狂うケイはクッキーを箱ごと机から取り去ろうとしたが、さすがゼルが持ち上げ、ケイから遠ざける。

そしてケイがカチンと来る一言を吐く。

「硬いこと言うとはげるでえ。」

ケイは色々はこの男に突っ込みたいことと、いくらでも頭に浮かんでくる罵声の数々いつきに押し寄せてきて、混乱してしまい、音に

ならない叫びを発する。

だが、ゼルは完全無視。顔色一つ変えず、もう一方の手でお茶をすすする。

ケイはどう見ても外人のこの男がなぜ関西弁なのか、ずっと疑問に思っているが、いくら考えても全く分からない。

アイブは文字も言葉も全て自分の母国の言葉に翻訳されて伝わってくるはずなのだが、この一癖あるゼルと言う人物が言葉まで染み出てきているのではないかと言う結論をケイは出している。

ゼルは容姿も性格も変わった人物だ。

ハニーゴールドでさらさらのワンレングスの髪に、同じ色の右目。

だが、顔の左半分が浅黒く変色しており、左目は光を映していない。

左からくる攻撃の反応が鈍いとケイは感じたことがあるので、どうやら見えていないようだ。

顔が変色していなかったら美青年の部類に入りそうな顔立ちをしている。

怪しい機械を造るのが趣味で、ケイはしょっちゅう実験台にされており、酷い目にあっている。

そして、ユウが記憶喪失になる前、ユウとコンビを組んでいた元パートナーに当たる。

ケイが知る限りでは陽気で人望が厚い人物だ。

「そうよあ、ケイ君 折角綺麗なロングなんだから、絶対はげたりしちゃダメよあ。」

ゼルと向かい合ってお茶を続けるミラノがクスクスと笑う。

こちらにもケイは色々と言わせて貰いたいのだが、やはり言いたいことが多すぎて奇声にしかならない。

ゼルも相当癖の強い人物だとは思うが、このミラノと言う女性には到底及ばない。

それほどこのミラノと言う女性は強烈なのだ。

ゼルが市販のタバスコだとすると、ミラノは特に辛いハバネロ。

または、もう人間の食べるものではないかもしれない。

ミラノは、ソパージュのかかった黒髪を肩まで伸ばし、パツチリとした大きな漆黒の瞳にケイとユウの姿を映している。

この女性、ゴスロリの趣味があり、今もその手のフリルがふんだんにあしらわれた服を身に着けており、一言で言うつぶりっ子。

メイクが得意で、ミラノがメイクをすると誰でも別人になってしまふほどの腕前だ。

普通の化粧より、ハリウッドでよくしている特殊メイクに近いものをケイは感じる。

化粧のときに顔に何かを貼り付けて顔の形を変えたり、念入りにしわを描いたり…。

そして、唯一、ケイとユウが苦手とする人物だ。

見かけだけだとケイも認めるかなりの美人なのだが。

その証拠に、さっきから黒龍はミラノから目が離せなくなっている。

だが、理由がそれだけではないのはケイにも分かった。

黒龍はミラノが女性であることに大きく驚いているのだ。

アイブになるためには強い決意が必要であり、戦い続けなくてはならないので、女性がアイブになるパターンは本当に少ない。

現にアイブの人口の9割が男性だ。

なので、20歳程度で成長が止まるアイブが住む天界は殆ど男ばかりなのである。

ケイに言わせれば全く華が無い。

アイブには男性しかいないと思いついでいる魔物の部族もいるほどだ。

穴が開くぐらいに自分が見つめられているのに気づいたミラノは、黒龍に向かってニッコリと微笑み返す。

そうすると黒龍は急いでミラノから視線を逸らした。

案外初心なヤツだと思い、ユウは思わず口元を緩める。

そんなやり取りを微笑ましく見ていたゼルがクッキーの箱を再び机の上に戻して、黒龍に友好的に話しかけた。

「そっちのあんちゃんは、ユウの使い魔かいな。初めましてえ、俺はゼルっちゅうんや。こっちは相棒のミラノや。よろしゅうな。」

2人は座ったままではあるが、丁寧にお辞儀をした。

黒龍も慌てて軽く頭を下げる。

アイブは使い魔を奴隷のように使うと聞いていたので覚悟はしていたのだが、少なくともこの2人はそんな部類のアイブでは無いらしい。

そんな事を黒龍が思っていると、ゼルがいきなり立ち上がり、ユウの前まで来るとユウの服に引っかかっていた純白の羽をそっと取り上げた。

「この羽だけは、俺と組んでた時と変わらず綺麗やなあ。」

ゼルはニッコリと微笑む。

「お前の目は節穴か？俺は心も綺麗だぞ。」

皆がどっと笑う。

ユウは自分の翼の話になることをいつも嫌がるのだが、ゼルだけは例外らしい。

冗談を言った後、無表情に戻り少し顔を伏せたが、無理やり話題を変えようとはしない。

少し寂しげなユウの表情に、部屋中が静まり返る。

軽い羽が窓から入ってきた風に乗って浮かび、くるくると飛ぶ。

ケイを始めとする5人は純白の羽が光を浴びながら宙を舞う神秘的な光景に見とれた。

アイブはみんな漆黒の翼のはずなのだが、ユウの翼だけは美しい純白の翼だ。

アイブは人間が言う悪魔のモデルと言われている。

それに対して天使は人間が空想で造った生物とアイブの中では伝えられている。

だが、ユウを見ていると天使が実在していると信じたくなくなってしま
う。

美しい銀色の髪と真紅の眼、そして純白の翼…少女にも見える容姿
…。

人間から見れば天使、いや神にすら見えるかもしれない。

だが、アイブからみれば恐ろしい色なのだ。

動物と言つものは普通と違つものを忌み嫌い、恐れる。

それはアイブも例外ではない。

本人は必死に気にしていないように振舞っているが、裏ではユウを悪く言うアイブも少なくは無い。

だからユウはこの翼の色をとても嫌っているのだが、ゼルはユウに会うたびにこの羽を褒める。

何度か見ているうちにケイにはゼルが言っていることがお世辞などではないことが分かった。

ゼルは

しばらく全員が宙を舞う純白の羽に見とれ、余韻に浸っていたが、ミラノが黒龍を少し観察した後、いぶかしげに口を開いた。

「ねえ、…アナタ大きさは違うけど昨日日本で見た龍にそっくり。もしかして…伝説の黒龍じゃないのお？」

黒龍はこんなに早く修羅場が来るとは思っていなかった。

嘘の任務完了報告をし、伝説の龍を天界に連れて帰ったなどと上層部にばれたら、ケイもユウもただではすまない。

黒龍も間違えなく上層部に隔離され、酷い扱いをつけるだろう。

下手するところの計画自体もばれてしまう。

そんなことになったら黒龍自身も当然困り、ケイとユウもこの世から消されてしまうだろう。

黒龍はわりと仲良くなっていた2人のことも心配した。

黒龍にも良心というものはちゃんとあり、この2人が痛い目見るのは可哀想だと思った。

黒龍がこの2人が最初に思ったよりもずっと優しいと感じたのと同じで、ケイたちもこいつは意外に人情（龍情？）があるとびっくりしていた。

『ひとまずどうにか切り抜けなくてはっ！！』

そう思い、黒龍はゆっくりと顔を上げ、ビクビクしながらミラノの瞳を見た。

第6話 男の子

6話 男の子

ミラノは黒龍に向かって子供のように無邪気な笑顔を浮かべている。だが、その瞳は黒龍を蛇のように見つめる…いや、捉えている。

黒龍の中に一層緊張が走った。

正に蛇に睨まれた蛙といった感じだ。

どうすればいいのか分からず、黒龍は石になる。

それから何分経ったのだろうか。実際は2分も立っていないが、黒龍には恐ろしく長い時間に感じられた。

凜とした声が沈黙を裂いた。

「そうだよ。こいつは伝説の龍、黒龍だ。ついさっき行ってきた任務の標的で俺の使い魔になった。」

その様子を見かねたユウが、壁にもたれ掛かり、組んだ腕を軽く振って黒龍の変わりに答える。

黒龍はハツとしてやっと我に返った。身の危険を感じ、いそいそとケイの後ろに隠れる。

「黒龍、安心しろ。この2人は信用していい。なんつたって俺の元

パートナーのコンビだからな。ミラノも無意味に人を威圧して遊ぶなよ。趣味悪いぞ。」

フリルの沢山ついた洋服が、彼女が肩を竦めるとそれにあわせてフリルが動く。

「つまらないのぉー。黒龍ちゃん、安心していいわよぉ。別にとつて食ったりしないから。それより、アナタたしかに小さくなってから目立たないけど、知識がある人が見ればすぐにアナタのこと分かってしまうと思うわぁ。現に私なんて昨日読んだ本にあった挿絵だけで分かってしまったものぉ。」

「そうやなあ。俺もなんとなく見たことあると思ったぐらいや。」

「ゼル、どうにかしてこの姿を変えることは出来ないのか？」

ケイが聞く。

「んー…ユウは攻撃術専門やからそんな術知らんやろっ?。」

ユウはゼルを見て小さく頷く。

悩んでいる男衆にミラノは場違いなような明るさで話しかける。

「あらぁ。なら私が術を掛けてあげようかぁ？私、こういう術は得意なのよぉ。」

このミラノの甘ったるいしゃべり方がケイもユウも大の苦手だ。

だが、今回だけは全く気にならなかった。

申し出てくれたことについて考えるので精一杯だったからだ。

しばらくはそれぞれで色々と考えていたが、しばらくして3人は顔を見合わせた。

結局『ばれたら困る!』という気持ちで3人もめっぽう強かった。

声には出さず、言葉の無いアイコンタクトで3人は相談し、遂に答えを出した。

ユウが小さくう頷いたのをみてケイも頷く。

それを見た黒龍も小さく頷きながら口を開いた。

「頼む…。」

黒龍が言い終わると同時にミラノはニッコリとして椅子から立ち上がり、黒龍に向けて両手を広げて詠唱を始めた。

いつもの甘ったるい話し方からは考えられないほどの澄んだ美しい声だ。

ゼルも珍しいものを見るかのように細く笑んで、椅子から立ち上がって腕を組む。

ケイとユウは固唾を呑んで見守り、黒龍はどうすれば良いのか分からず、キョロキョロト辺りを見回している。

しばらくすると戸惑う黒龍の周りに蒼く輝く陣が現れ、黒龍はまば

ゆいほどの光に包まれた。

「眠りし姿よ、今こそ原形をあらわすべし……!!」

ミラノがそう言い放った瞬間、ミラノの言葉に合わせるように黒龍を包んでいる光が眼を開けられないくらいの一層まばゆい光を放った。皆耐えられず、その場にいた全員がいつせいに目をつぶった。

目を瞑らなかつたら目がつぶれてしまっぐらいの光量だったのだ。

それから約1分後、目を瞑っていても感じたほどの激しい発光はもう今は感じられない。

黒龍の新たな姿をみたいっ。という好奇心には勝てず、ケイは恐る恐る眼を開けた。

最初にまだピンボケしている視界に入ってきたのは驚きのあまりいつもの細い

目が2倍以上に開かれて『あるもの』に釘づけになって座り込んでいるゼルの姿だった。

よほどの事でなければ彼はこんなに取り乱だしたりしないだろう。

ケイはゼルの視線をゆっくりと辿っていった。

何と言うことだ。今回はやはり、ゼルが取り乱すだけの事はあるよほどの事だった。

そこには見たことの無いかわいらしい一人の子供が座り込んでいた。

布を一枚まどっているだけの男の子は薄い茶色の髪に黒の眼をしていた。

ケイの眼よりももっと深い黒、暗黒とでもいうのだろうか。

6歳ぐらいの男の子の整った顔は驚きの表情を浮かべて自分自身の体を見ていた。

第7話 アブナイハシ

第7話 アブナイハシ

少年は大きく息を吸い込み、叫ぶ。

「な、なんじゃこりゃー……！！！」

声も容姿相応のものであり、どう考えてもただの可愛らしい男の子にしか思えない。

「こ、黒龍だよ…な？」

腰を抜かしているケイは、座ったまま叫んだ男の子に恐る恐る聞く。

「俺のほうが聞きたいぐらいだぜっ、俺って黒龍だよ…？」

整った子供の顔立ちを歪めながら幼い男の子…黒龍は言う。

「安心してえ、あなたは間違いなく黒龍よ」

ミラノが黒龍の茶色の髪を愛おしそうになでながら言った。

子供扱いされたのが頭にきたのか、黒龍はミラノを睨んで怒鳴る。

興奮して口数がかなり増えている。

「なんで人間の子供をまねたような姿なんかになんなきゃいけねーんだよ！」

「だってアナタ、黒龍と言っても人間の歳に換算するとせいぜいそのくらいよお」

ミラノがニヤニヤしながら嬉しそうに言う。

彼女は黒龍の子供姿が痛く気に入ったらしい。

たしかに龍の姿よりも遥かに和むと他の男3人も思った。

だが、この姿になった黒龍には深く同情する。

特にミラノに気に入られたところに。

「…おまえ何歳なんだ？」

ユウは大して驚いたようなそぶりも見せず、落ち着いた声色で聞く。
術に詳しいユウはミラノのが黒龍をどんな姿にするかあらかじめ予想がついていたらしい。

「6000歳ちよつとだ。」

黒龍はまだ不機嫌な顔をユウに向けて答えた。

「へえ」

「ろっ…!？」

ユウの冷めた言葉と同時に正反対の反応のケイは驚いてミラノがお

茶をしていたときに座っていた椅子を倒してしまった。

この年齢に驚いたのはケイだけだ。

他は、大抵の魔物は恐ろしく長い時間を生きているということを知っている。長いキャリアの間に良く知っていた。

それを知っていたら黒龍のような伝説にも出てくる生物がそれぐらい生きていても全然不思議じゃない。

むしろ予想していたよりも若いぐらいだ。

「クロちゃん！アタシ、アナタに似合いそうな服持ってるわぁ
こっちにきて！」

黒龍は不意打ちを食らった。

6000年も生きてきた黒龍は20年も生きていない女にクロちゃん呼ばわりされるとは思っていなかったらしい。

黒龍は慌てふためく。

「クロちゃん！？え？ちよっ…！」

ミラノは黒龍がいい終える前に黒龍の手を引いてドアに向かって歩き出していた。

『明らかにひこずられてるようだな。』

3人はそう思っていたが口には出さなかった。

ミラノの怖さは経験済みだったからだ。

必死に助けを求める黒龍をユウとゼルは完全に無視し、ケイはさっき倒した椅子を直し、その椅子の陰に隠れて黒龍に対して苦笑いしながら手を合わせた。

『裏切り者っ……!!』

と言うように黒龍は3人を恨めしそうに見るが、ユウはそっぽを向いてクツキーをかじっているし、ゼルは目を合わせないように腕を組んで口笛なんか吹いている。

ケイに至っては未だに天災が来る前のようにビクビクと椅子の陰に避難しているのだ。

こんな3人に助けを求めても全く意味が無い。

そう判断した黒龍はミラノに抗おうと必死で踏ん張ったが、彼女の馬鹿力の前では無意味だった。

ドアが閉まり、嵐が去った後ゼルが視線をユウに合わせ、ゆっくりと口を開いた。

「黒龍の寿命は人間の1000倍かあ…すごい情報やな。今のうちに龍と一緒に本部に持ってとくかあ？」

笑みを浮かべながら話すゼルにユウは表情を変えず答える。

「そんなことする訳ないだろう。あいつはもっとでかい情報を持っ

てるんだからな。」

ゼルとユウは世間話をしているような軽い調子で話している。

この2人のように頭も良くないし、ポーカーフェイスも苦手なケイはなんだか置き去りにされている気分だ。

ゼルはユウの口の端に浮かんだ不敵な微笑を見逃さなかった。

「へえ…お前にしては珍しいな。危ない橋かいな」

ゼルがユウと同じように薄く笑みを浮かべる。

核心を突かれたケイの心臓の鼓動がどんどん早まっていく。

『どうにかしなきゃっ!』そう思ったケイが、勢い良く立ち上がる。

「ゼル!そ、そんなことじゃないから!安心して!ね!?!」

ケイはあまりにも早口で喋ったので危うく舌を噛むところだった。

ケイの努力も虚しく、誰が見てもなにか隠したがっているのが明らかに分かる。

そんな不甲斐ない相棒を見て、ユウは椅子に腰掛けて、頬杖をつきながら大きなため息を漏らす。

普段こういうのはユウの役割なので、ケイは隠し事はめっぽう苦手なのである。

身構えているケイにゼルは大笑いして答えた。

「隠さんでええ。そうユウも言っただろう？おもしろそうやないか！俺らも一口乗っただるで！」

ゼルはヤル気満々という感じだ。

ケイはやっとユウが黒龍に『隠さなくていい』と言っていたことを思い出し、すっかり忘れていた自分と、明らかに不審だった自分の行動とに二重で恥ずかしい思いをすることになった。

「今回はかなり危ないぞ。下手したらこの世から消されるかもな。」

ユウは相変わらず世間話をしているときと、なんら変わらない軽い口調。

「そりゃたのしみや。久しぶりに楽しめそうやな」

なんで危ないことに首を突っ込みたがるのか。

ケイには全く理解できない。

そんなケイの気持ちなど露知らず。

ポーカーフェイス名人のユウとゼルは共に口に薄い笑みを浮かべた。

第8話 明かさない記憶

第8話 明かさない記憶

「よくもこんな服させやがったな…！いつか殺してやるからな…ひつく」

ゴスロリ風の服を着せられた黒龍はもう泣きだす寸前だ。

そんな不甲斐ない黒龍を見てから遠い目をしてケイは呟く。

「まだショートズボンだけでしたよ…俺なんか…」

ケイはミラノに関してならもっとひどい経験をしている。

自分の名誉のためにも、ケイはこの事を誰にも話したらなかった。

だが、めでたく(?)この2名に共通点が生まれた。

ミラノがおっかないということだ。

これは、2人だけではなく全員が思っていることなのだが。

「あらあ、そこの2人なにかいったかしらあ？」

「いえ！なにも！」

一瞬のずれも無いすばらしいタイミングで2人は言い、背筋を伸ばす。

やはり、ミラノには勝てないのだ。

「お前らそろそろ帰れよ！俺たち任務帰りだぜ？疲れてるんだよ」
見かねたユウが2人に助け舟を出した。

それに、ケイもユウも黒龍の話をじっくりと聞く時間が欲しかったのだ。

ミラノがいたら落ちついて話すことなんて到底無理なことだとユウは判断したらしい。

「はいはい、いわれんでも帰ってやりますよ。なんかあつたら遠慮なくいつてくれや」

ゼルは拗ねたように口を尖らせる。

ユウは上手くゼルをはぐらかして結局、『アブナイハシ』について深くは話さなかったのだ。

それがこの人物の不機嫌の元らしい。

ケイはゼルが話したときには必ずと言っていいほど頻繁に違和感を覚える。

いくら経っても外人が関西弁で話すのに慣れないのだ。

「あ！そうや」

ケイの疑問を知らないゼルが何かを思い出したようだ。

「ケイにはなしがあるんや」

「俺に？」

ケイは驚いた。

ゼルに話を聞かされるようなことに全く心当たりが無かったのだ。

『もしかして関西弁の理由教えてくれるの！？』

とケイは心の隅で期待してしまっただが、勿論そんな訳がない。

ゼル自身が関西弁を話している自覚があるわけが無いのだから。

「あ！ユウ君 前言ってた本みつけたわよお。私の部屋にあるからいきましょお」

タイミングを計っていたように（計っていたのだろう）ミラノがユウを誘う。

ユウは少し抵抗したが最後は大人しくなって、ミラノにひこずらついていた。

ミラノがユウのみぞおちに、見事な右ストレートを入れてからユウが大人しくなったのは、ケイが気づいていたくらいなので全員が気づいていたのだろう。

『ごめんユウ！やっぱミラノは怖い。大人しく成仏(?)してくれ

「！！」

ケイは心の中でしきりにユウに謝った。

ユウの使い魔である黒龍もユウと一緒に出て行った。

瀕死状態（？）のユウが心配らしい。

それに黒龍はユウの使い魔だから、ここはユウについて行くのが筋というものなのだ。

ゼルはよほどこの話をケイ以外の誰にも聞かせたくないらしい。

そんなゼルの計画通り、モダンな雰囲気のある部屋にはケイとゼルは2人きりになった。

「…で、話って？」

ケイは沈黙を破った。

「ユウのことや。」

ゼルは口元にかすかな笑みを浮かべてはいるが、その瞳は今まで見たことの無いほど真剣だ。

「ユウはお前にかなり心を許してるみたいやなあ。だからご褒美にお前に会う前、記憶喪失になったばかりのユウについて少し話してやるわ」

ケイは度肝をぬかれた。

今まで、何気なく聞いてみても誰もユウの過去について教えてくれなかったし、しつこく聞いて相手の気分を損ねるのを恐れて深く追求したことは無かった。

なので、ケイはユウの過去については何も知らなかったのだ。

ゼルは再びケイとユウが部屋に入ってきたときに座っていた、いつもユウが座る席に足を組んで座る。

ケイもゼルに向かい合う様にゆっくりと自分の席につく。

卓上のクツキーを一枚ほお張った後、ゼルはゆっくり話し始めた。

「2年前、ユウが記憶喪失になってすぐ、俺とユウはコンビを解消したんや。

そんときのユウは一言も喋らんかったし、表情も無くて、まるで人形みたいやったわ。

ユウが記憶をなくしたときには、俺と組んで丸1年経ってたんや。

それでも俺はユウ本人から、あいつがアイブになる前のことを何一つ教えてもらったことが無かったし、あいつ、元々無口なヤツやったからおしゃべりな俺と仲が良かったって訳やなかったんや。

やから俺がユウに教えてやれたことは、本当にあいつの名前くらいや。

そんな名前しか知らない何処の馬の骨とも知れないヤツでも、他に

全く知り合いがないユウにとつちや唯一自分のことを知ってる特別な人間やと思ってくれたんやろうなあ。

記憶が戻らず、任務を1人でこなしてた俺に迷惑かけるんが嫌やと思っただんか、いつも申し訳なさそうに俺を見よった。

俺は、ユウにそんな顔してほしくなかったからコンビは解消したんや。

でも天才少年としても、翼が白い化物としても有名だったユウをみんなが避けよった。

ユウと並んだら自分の力が劣り、自分が霞むことも分かってたんやろう。

それに、記憶喪失の少年に全てを教えながら世話しようなんてだれも思わんかった。

そんな周りの態度を感じたのが、ユウ自身も誰にも興味を示さんかった。

結局ユウのことはパートナーがみつかるまで俺が世話することになったんや。

折角コンビまで解消したのに、結局俺らの生活は変わらんかった。

自分でも無駄なことになってしもと思っただわ。

そんなユウは、時々体が透けて、この世から消えそうになってた。

お前もしつとるやろう？

大切な人が死んだとき、アイブは消えて再び輪廻の輪に戻る。

大切な人が誰かすら分からなくなってもうたユウは、いつ消えても全くおかしくない存在やったんや」

ゼルは紅茶を飲んで一息ついている。

まるで貴族のように優雅にお茶を啜るゼルはケイを焦らしているようだ。

案の定、ケイはその一息の間も待てず、ゼルに聞いた。

「…それから？」

「それだけや」

ゼルは顔色一つ変えない。

「は!？」

「このあとはお前が知ってるとおり記憶喪失になった1年後、ロン毛のジャパニーズ新米アイブとコンビを組んだ。」

「でも、俺と組んだときユウは消えかけてなんかなかったぜ!？それに無口ではあったけどちゃんと話したし、表情もあった!他になにかあったんだらう?」

「いいや、なんもあらへんかった。記憶喪失になったユウが初めて

言葉を発したのはお前と初めて会話をしたときや」

ケイは不思議で仕方なかったので、ゼルに聞く。

「誰とも話さなかったのになんで俺と話したんだろっ…?」

ゼルは目を細めて深いため息をつき、堂々とした声で言い放つ。

「アホウ」

いきなりゼルに馬鹿にされたユウは呆気をとられた。

「アホいうな!」

ひとまずケイは言い返したが、なぜアホ呼ばわりされたか分からない。

「はあ…お前ユウに初めて会ったときのことおもいだしてみい」

自分からユウに話しかけたような気がするが何を言ったか思い出せない。

ゼルは考え込んでいるケイをみてさらに一言。

「ニブチン」

ケイは何度も馬鹿にされて虫の居所が悪いので、すかさず言い返す。

「ニブチンいうな!ゼルは知ってるんだろ?教えてくれよ!」

ゼルはさっきのため息以上に深いため息をついた。

「すぐ怒ると禿げるでえ。おまえもつ16やろ？自分で思い出しな」
そう言うとゼルはふらふらと扉に向かってゆく。

「けちゃんば！」

ケイの罵声に対してゼルは扉に向かって歩き続けながら無造作に腕を軽くふるだけだった。

流石大人と言う感じである。

ゼルが出て行った後もケイは必死で思い出してみたが、結局思い出すことが出来なかった。

第9話 溶けた氷

第9話 溶けた氷

深いため息をつきながらユウは部屋に帰ってきた。

『ミラノに関わるのはもう懲り懲りだっ！』ユウは乱雑に椅子を引き、座る。

部屋中に趣味のゴスロリ服がところすましにかけてあり、まさにミラノワールド炸裂と言う感じの部屋でユウは居心地の悪さを感じたほどだ。

今なら『口から魂がでてるよ』と言われても否定する気になれない。幸い、お調子者のケイはベットに座り込み、考え事をしていて、例の癖が出ている最中だ。

今回だけはケイの癖に感謝し、ユウは思わず微笑した。

戦闘中に見せるような冷ややかな不敵な笑みではなくやわらかく、温かい笑顔だ。

最も、ユウ本人は気づいていないがこんな笑顔を見せるのはケイの前だけである。

黒龍はユウに気づかれないようにその微笑を盗み見していた。

ミラノとは正反対のシンプルイズベストのユウたちの部屋に帰って

きて黒龍にはそこまで観察する余裕が出来ていた。

本当に自分を攻撃したアイブなのかと疑ってしまうぐらいだ。

今まで寡黙なふりをしていたのは自分の主人となった少年を観察するためなのだ。

実はケイ以上にうるさく、ユウには負けるが、口が悪いことを自負している。

…今まで観察した結果、ユウは思っていたよりもずっと優しい少年だ。

特に相棒に対してはとびきり。

一見厳しくケイに接しているように見えるがこれは優しさの裏返し。

実際はとても大切に思っている。

初めて会った黒龍が短時間観察しただけでも強く感じる程に。

正直、『何で俺がこんなアイブのガキに仕えなきゃならないんだ!』

と言う気持ちが強く、誠心誠意仕えるつもりなんてさらさら無かった。

実力があるのは認めるけれど所詮はまだ子供、6000年の時を生きてきた自分とは比べ物にならないほど若いのだ。

人（てか俺は人じゃなく龍か）の上に立つほどの力量があるわけが無い。

この場合の力量と言うのは戦闘能力のことなどじゃなくて人を惹きつける魅力や心の強さ、思いやりの事を指す。

だが、そう思っていたが俺の考えは間違っていた。

容貌のせいで人望や信頼は無いものの常に人の心を考えて行動し、強固の意志を持っている。

現に内面から人を判断する3人が彼の傍にいるのだ。

この容貌が無かったらこいつはもっとすばらしい人物になっていただろう。

それだけが口惜しくて堪らない。

『ユウになら仕えてもいいかもしれない』

そんな気持ちがユウを観察していたら不思議と沸いてくるのだ。

俺は今まで1匹だけで生きてきた。

黒龍一族は、生まれて100年が経つと母親から離れなければいけないから。

それからは寂しさを紛らわせるために人通りの多いところに出てはそれをよしとしないアイブたちと、自分の身を守るため必死に戦ってきた。

もう6000年の間に何人殺したかなんか覚えていないほどだ。

だが、俺は人を傷つけたこともないし、これからも傷つけるつもりなんてなかったのだ。

なんだか言葉にすると恥ずかしいが、本当に寂しかっただけなのだ。

そんな自分を当然の様に攻撃してくるアイブが憎くてたまらなかった。

俺だって生き物なんだ、命の温もりを求めてなにが悪い。

アイブなんて全員、人間しか心が無いと思っている自己中心的なやつだと俺は思っていた。

だから初めて芽生えた気持ちだ。

今でもアイブは憎くて堪らないが、少なくとも俺が思っていたアイブとは、根本から全く違うアイブに4人も出会えて、俺の考えも変わってきた。

なんだかんだ言って俺を友達のように扱ってくれる2人の力になりたい。

5900年ものあいだ触れていなかった心の温かさ。

それに心の氷をじりじりと溶かされているのだろうか、胸が熱い。

ただ、1つ心配なことが

「クロ、どうかしたか？」

気づいたらユウが顔を覗き込んでいる。

「いや、なんでもない。」

ユウの紅い瞳に映る心配の色を消すように悪戯っぽく笑って見せた。

そうするとユウがにっこりと温かく笑った。

ケイに向けてじゃなく、この俺に向けてっ。

「お前、寡黙なふりして黙ってるよりそうやって話して笑ってたほうがいいと思うぞ。」

絶対ケイと仲良くなれる。だってお前ら、どことなく似てるし。」

ユウはケイに友達を作ろうとして言ったのかもしれない。

それでもなんだか嬉しい。

「そつだ、これやるよ。」

ユウは恥ずかしそうに頭をかきながらポケットから十字架のブローチを取り出した。

これはケイがベルトにつけているのと同じもので、ユウは黒いポンチョを留めるのに使っている。

「ミラノお手製で、魔力が高まる。…らしいぞ。」

ユウは膝をついて黒龍を見上げるようにして胸にブローチを付ける。

黒龍は相変わらず俯いているのでユウがブローチをつけているのが見える。

ユウの頬に温かい水滴がぽつぽつと落ちてきた。

ユウが顔ををあげて黒龍の顔を見ると、黒い瞳からは止め処無く涙があふれ出ている。

「どつして泣いてるんだ？」

ブローチを付け終わったユウは黒龍の胸からそつと手を離しながら聞いた。

「ちがう…泣いてるんじゃない！こ、これは氷が溶けてるんだ…ただそれだけだ。」

黒龍は必死に服の袖で涙を拭う。

ここにいたのがケイではなく、ユウで良かった。

ケイだったらこの意味が分からず、更に追求して黒龍を困らせただろう。

ユウはちゃんと意味を理解して

「そうか。」

と言っただけだった。

黒龍の涙はまだまだ止まらない。

3人お揃いのブローチが引き金になり、氷が一気に溶け出したのだ。

ユウは黒龍を椅子に座らせて自分は壁にもたれ掛かり、腕を組んで目を瞑ってただ待っている。

氷が全て解け終わるのを。

第10話 驚きの方法

第10話 驚きの方法

「ぐす、ぐすん。」

黒龍ことクロ（ミラノ命名）はまだ涙ぐんでいるがあらかた落ち着いてきたようにユウには見える。

正直、もう泣き止まないかと心配したぐらいだ。

何とクロはもう3時間も泣きっぱなしだったのだ。

クロに言わせれば5900年の悲しみを、たった3時間で終わらされたのだから褒めてもらいたいぐらいなのだ。

だが、流石のユウもそこまでは考えておらず、もう1人の変なヤツに目をやった。

それは無論、ベットに座り込み、未だ考えにふけている相棒、ケイのことを指している。

6歳児が泣いているのは見ていて微笑ましいくらいだが、16歳の大の男がぶつぶつ言っているのは気味が悪い。

なんと、この少年も信じられないことに、クロがさめざめ泣き続けた3時間、2人に気づかず、時々独り言を口にするだけでずっとそのままなのだ。

もう呆れたというか…なんとなくか、これはもう賞賛に値するレベルなのではないだろうか、ユウは思いながら深いため息をつく。

ユウが殴らないと、この少年は一生を考えに更けて過ごすことになるだろう…。

『さて、そろそろ起こすか。』

とユウは思い、部屋を見渡して、相棒の目覚めに必要な手ごろな凶器(?)を探す。

凶器を探すため、少し背伸びをしたら、ユウの腹部が軽く痛んだ。

ユウは思わず腹部を押さえてしゃがみ込む。

この場所はミラノに右ストレートを入れられたみぞおちである。

ミラノと言う女性はかわい子ぶっているくせに、恐ろしい馬鹿力の持ち主で、彼女にかかれれば象でも虎でも瞬殺だろうとユウは思う。

『くそ！ミラノめ…覚えとけよ！』

ユウは表情をいがめながら復讐を堅く決意した。

…と言ってもミラノに復讐なんかするのなら命1つ捨てる覚悟がいるのだが。

それはさておき、ミラノの事を思い出したら、ユウはだんだん腹が立ってきた。

『手ごろな凶器も見当たらないことだし…。』

ユウは探索をやめ、ケイにズカズカ歩み寄る。

ケイの目の前まで来ると、左手でケイの肩を掴み、状態を起こさせる。

そして右手でミラノに倣ってストレートをケイのみぞおちに一直線

流石の鈍感なケイも現実に戻らないわけにはいかなかった。

いつもなら「痛っ！」とか「なにするんだよっ！」とかひとまず反応を示すケイだが、今回だけは言葉を発する余裕もなく、ベツトに倒れ、腹部を押さえて悶絶している。

ユウはクロが口を縦に開けてあっけらかんとしているのを見て、クロがすっかり泣き止んでしまうほどの満面の笑みを浮かべて一言。

「ああ！スツキリした！」

クロはユウに対して『ちょっといいやつじゃん』なんて思っていた自分がなんだかとても馬鹿らしくなった。

前言撤回。見かけに惑わされるなっ、こいつは悪魔の中の悪魔だっ！

これにてユウの腹癒せはめでたく終了した。

だが、何もしていないのにいつもより重い攻撃を受けたケイにしてみればいい迷惑だ。

文句の1つでも言いたいが、それどころではない。

『さっきの1発は効いた…小柄なユウの体のどこにこんな馬鹿力があるのだろうか…うう。』

「さて、クロ。人間に戻る方法について話してくれ。」

ユウはケイの隣に座わりながら『夕飯まだか?』みたいな軽さで言う。

だが、ケイにとってはそんな軽い話題ではない。

証拠に、それを聞いた瞬間、ケイは痛みを忘れて凄い勢いでユウの横に座りなおす。

『そつだ。人間に戻る方法があるんだ!』

「早く話してくれよ!」

さっきまで悶えていたのが嘘のような澁刺とした表情だ。

ケイは子供のように目を輝かせてクロが話し出すのを待っている。

クロはもう何回ケイに驚かされただろうか。

『こいつの体はどんな構造をしてるんだか…。』

クロは苦笑いをしてからケイの望むとおり話を始めた。

「簡単なことだ。大切な人がアイブのことを思い出せばいいんだ。

お前の場合は妹がお前の事を思い出す。たったそれだけの事なんだよ。」

並んで座っている2人の表情はクロから見たらとても愉快だった。

2人とも『は！？』と言う感じの表情を浮かべながら首を傾げる。

それから同時に顔を見合わせてまた首を傾げる。

そしてまた『は！？』と言う感じの顔をこちらに向けてくる。

この動作が3回繰り返され、なんだか可哀想になってきたので、クロは2人に助け舟を出した。

まあ、結局助け舟の内容の意味をしっかりと理解できたのは博学なユウだけだったが。

「記憶の書を知ってるだろう？」

クロのその言葉を聞いてユウは非常に驚いたが、ケイは全く意味が分かっていない。

可哀想なことに、1人だけ更に疑問の表情を深めた。

アイブの基本知識さえあれば十分理解できることのはずなのだが。

『ここまで無知だと哀れだ…。』

なんてクロは思いながら哀れなケイを見守る。

そんなことを思われると、ケイは更に哀れになるのではないのだろうか…。

ユウはクロのヒントであらかたの事は理解できたようだ。

いつもの表情で眉間にしわを刻んでいるケイの横顔を見つめている。

さて、2人の目線の先にいるケイは実は、『思い出してもらおう方法なんて俺は知らないっ!!』ととっくの昔にさじを投げていた。

今、眉間にしわを刻んでいるのはユウの見事な右ストレートのせいで中断された考え事を再開していたからだ。

現にケイは2人の視線になど全く気づいていない。

ユウに初めてかけた言葉…。

たしかに自分から話しかけたのだが、心を閉ざしていたユウに対してそんな特別な言葉をかけた覚えなど全くないのだ。

それでもどんな言葉だったのか気になって仕方ない。

自分が初対面の人にかける言葉なんて『こんにちは』とか、『初めまして』とかありきたりなものしか思いつかないのだが、そんな言葉で口を開いてくれるわけがない。

ユウに聞いたら一番早いのだが、そんなことをしたら本当にゼルが

言つとおり自分が『ニブチン』になつてしまつよつな気がする。

そんなことをケイが考えている頃、2人はなんとなくこいつが考え事の世界に行つてしまつているのが分かつてきた。

またぶつぶつと聞き取れないような独り言をケイは発し始めていたのだ。

内容は妹に自分のことを思い出してもらつ方法だと思ひ込んでいるが。

今度はユウに殴られる前にクロが小さな手でケイの両耳を思いつきり左右に引つ張つた。

「
つー!」

クロのおかげで少しの痛みでこつちの世界に戻つてくることが出来た。(でもやつぱ痛いつ)

ケイが正気に戻つてすぐ、痛みから立ち直るのは待たず、ユウが話し出した。

「お前の頭で考えても分からなかつただろう。『記憶の書』って言うのは古すぎて作者も分からないアイブの本だよ。有名な本なんだが、読書と無縁のお前が知る分けないか。この本はタイトルの通り記憶のあり方について書いた本なんだが、少し非現実的な内容なんだよ。俺もただの伝説だと思つてたから詳しくは読んでないんだけ

どな。」

「へえ…そんな本があったのかあ。非現実的ってどんな風に？」

この問いに答えたのはクロだ。

「省略して言うと、世界のどこかにある4つ呪文を1枚のアイブの羽にこめ、その羽を大切な人に渡す。って感じた。」

「おいおい、それってホントに伝説みたいな話だなあ。」

ケイはこんな身近に方法が有った事への驚きとその伝説がかった内容への疑いが混ざって、不思議な気分になっている。

そんな苦笑いのケイに同じく苦笑いのユウが諭す様に言う。

「俺も最初はそう思ったけど俺たちはもう既に伝説の黒龍に会い、その伝説の存在が言ってるんだ。もう疑っても仕方ないだろ。それに、本当なんだろう？クロ。」

ユウが聞くと、クロはユウの紅い瞳から目を離さず、深く頷いた。

「ほら、本人もこう言ってるんだ。間違えないだろ。」

ユウはケイに微笑みかける。

つくづく自分の単純さには呆れてしまう。

ユウに微笑みかけられただけでケイは『ダメで元々！やってやるうじゃないか！』と言う気分になったのだ。

ケイは『お前には負けるよ。』と言う感じに優に微笑み返した。

「よし。決まりだな。」

「あああああーーーーー!!!」

この奇声はケイだ。

『せつかく一段落したのにうるさいやつだ』と言う風に2人はケイを見る。

「いけない、もうこんな時間だ。食堂が閉まっちゃっつ！もう貰いおきの食べ物はないんだ、急ごう！俺もっ腹ペコペコだよお。」

ケイはオーバーアクションとも言える様に目を瞑って頭を抱える。

2人は思わず笑ってしまった。

「この状況で腹の心配が出来るなんてよっぽど神経が太いんだな。面白いヤツ!!!」

ユウの気持ちも代弁してクロが言う。

「うるさい！腹が減ってはなんとやらって言うじゃないか!!!そうと決まれば飯だ、飯!!!早く行こうぜ!!!」

「仕方ないな。行こう!!!」

ユウは笑って賛成した。

なんだかケイを見ていたら自分まで腹が減ってきたのだ。

第11話 図書館の猫兄弟

第10話 図書館の猫兄弟

食べ盛りの16歳2人と6000歳の子供(?)は食堂の料理を全て食べつくす勢いだ。

特にケイの勢いには2人と料理を作っている使い魔たちも驚かされる。

というかユウとクロが食べた量などケイに比べたら雀の涙で、食べつくそうとしているのはケイ一人だ。

ケイが大喰らいだと言うことは食堂にいる全員が知っていることではあったが、今日はまた一段とすごい。

その証拠に、ケイの目の前には既に巨大な皿が積み重なり、皿の山に妨害され、ケイと向かい合って座っているユウとクロはケイの顔が殆ど見えなくなっている。

こいつの体はいったいどういう構造をしてるんだ…。

前にも同じことを思っていたクロの疑問は解決などせず、更に深まった。

それに対してユウは呆れ顔で皿まで食べかねない勢いの相棒を見る。

(正しくは相棒が平らげた皿の山)

こいつは頭を使うと食欲が更に増すんだよなあ…。なんて思っているうちにまたケイのおかわりの声がもう殆ど誰もいない広い食堂中

に響き渡る。

ユウは腕を組んで、大きなため息をつく。もう呆れて声も出ない。

ユウもクロももうとっくに食べ終わっているのにケイは全く気づかず、ただひたすら1人で食べ続けるのだ。

初めてこいつの食べっぷりを見たとき、自分の食欲が嘘のように引いていったことを思い出したユウは、初めてこの食べっぷり（しかも食欲増加期）を見たクロはさぞ気分が悪いだろっ！…そう思い、クロのほうに顔を向けたが、隣にあるはずのクロの顔がない。

代わりにクロはユウが座っている長椅子をベット代わりにして可愛い寝息を立てて寝ている。

瞼に昏間ユウが切りつけた跡が残っているが、目蓋が赤く腫れているため目立つだけで、治癒が速い龍族なだけあってもう殆ど治っている。

「ごちそうさま！あー食った、食ったっ！！」

空気を読まない鈍感な大きな相棒の声がまた食堂に響き渡る。

幸い、クロは疲れていたらしく、眠ったままだ。

ユウは思わず拳を握り締めたが、殴るとこいつは更にうるさくなるだろうと思いい、ぎりぎり思い留まった。

「ケイ、俺は少し用事があるからクロを連れて先に部屋に帰っててくれ。」

驚くべきバランス力で皿の山をいっきに返しに行くケイにユウは声をかけた。

声が怒りで軽く震えている。

「え？いいけど…用事って…。」

「いいならさっさと片付けて部屋に帰れ！」

夢の中にいるクロのことを考えて、ユウは怒鳴りはしなかったものの、静かな言葉からはひしひしと恐ろしいほどの威圧感が滲み出ている。

ケイは今日の恐るべし右ストレートの威力を鮮明に思い出した。

思い出しただけで吐きそうになる…。

もうあんな目にあうのはごめんだと思ったケイは大人しくユウに従った。（従わなきゃどんな目にあうか）

眠っているクロを起こさないように、出来る限り優しくおぶる。

本当にあんな巨大だった生物なのか…そう思うほどクロの体重は軽く、ケイの耳元で安らかな寝息を立てている。

「じゃあ、頼むな。」

そう言い残し、ユウは先に食堂を足早に立ち去った。

アイブの住居はアパートのような建物で、この島にだけでも住居用の建物が数え切れないほどある。

そのうちの1つである特別新しくも古くも無い建物の最上階である5階にケイたちの個室はあった。

ちなみに、ゼルとミラノの部屋は3つほど隣の建物にある。

2人の部屋に着くと、ケイは自分のベットにクロを寝かし、毛布をかけてからしばらくクロの寝顔を見ていた。

とても幸せそうに眠るクロの細く柔らかい茶色の髪を繊細なガラスを扱うかのように優しく撫でながらケイは呟く。

「お前が頼みの綱なんだ…今日はゆっくり休んで、明日から俺の力になってくれ…」

返事をするように大きな寝返りを打ったクロを見てケイは思わず顔を綻ばせる。

それから、ケイはクロの眠る灯りをけした暗い部屋を後にした。

そして向かったのはさっきいた食堂の横の建物…ケイとは全く無縁のもので、これからもそうだと思いついていた巨大な図書館である。

図書館は任務以外では、地上に行けないアイブたちの唯一の娯楽の場として、多くのアイブに親しまれているため24時間開いている。

その広さと言ったら…日本の国会図書館なんて比べ物にならないほどの大きさだ。(行ったこと無いけど)

アイブは世界中から集まってくる。

従って色々な国の本が沢山そろっているのだ。

ケイは図書の受付にいる猫のような使い魔におもむろに話しかける。

「あのさあ、『記憶の書』って本どこにあるか分かる？」

使い魔は少し上目遣いになり、腕を組みながら考え込む。

「ああ！『記憶の書』ですね？運が悪いですねえ。滅多に借りられることのない本なんですがこの図書館にある1冊はついさっき、帽子を深くかぶった制服を着た人が借りていきましたよお。」

使い魔は頬を自分の爪で軽く掻きながら『残念ですねえ。』と言う風な苦笑いを浮かべている。

「そつか。じゃあ、この本はあるか？」

ケイはポケットに入れていたぐしゃぐしゃになったメモを使い魔に見せた。

「ええ、ごじますよ。少し待っていてください。これから交代なので私の兄に頼んでおきますね。」

そっぴい残して使い魔は本棚の間に消えていった。

この本は、食事に向かう途中ユウが教えてくれたものだ。

『記憶の書がなかったのは正直痛い、俺が人間に戻るためにはこの本も必要だ。』

そんなことを思っているうちにさっきの使い魔にそっくりの使い魔が来た。勿論ケイがリクエストした本を抱えて。

その本は、実物の猫ほどの大きさの使い魔の姿が隠れてしまつぐらいの大きさがあつたが、対比物が悪かつただけで、特に大きいと言うわけではない。

ただ厚さは別だ！他の本と比べてもそんなに厚いわけではないのだが、それでも小説を1ページも読みきらないうちに寝てしまつと言う特技(?)を持つケイには十分すぎる量だ…。

まあケイの本嫌いはさておき、大きさも普通、厚さも一般人からみたら普通と言うホンツツトに見かけは平凡などこにでもある本である。

ただ、内容はケイにとって他の本とは比べられないほどの価値がある。

「これを借りるのですね？」

声まで弟とそっくりだ。

「ああ！ありがとよ。」

使い魔は器用に肉球の間に羽ペンを挟み、利用記録の大きな本にケイの登録番号を書き込む。

「あれ？俺登録番号言っただっけ？」

ケイは机の上から本をとりながら聞く。

使い魔は手を休めずに、軽く笑いながらそれに答えた。

「いえいえ、紅眼のユウのパートナーとしてあなたは有名ですからね。それに私たちは登録番号は丸暗記しているんです。」

なんだか計は複雑な気持ちになった。

ケイは元々目立つのが好きな方で、人間だった頃はよく目立ちたくて有ること無いことぺらぺらと話したものだ。

だが、相棒のユウのおかげで有名になると言うのは…。

そっか。っと言ってケイは苦笑いを浮かべた。

「それだけじゃありませんよ。あなた方2人は使い魔にも分け隔てなく接してくれると言うので使い魔の間では頗る評判が良いのですよ！…なぜアイブたちは見かけなどで貴方の相方様を判断してしまおうのでしょうか。」

使い魔は悲しい表情を浮かべ、目を伏せた。

『アイブなんかよりも使い魔たちのほうが余程話が分かる！』とケイはいつも思う。

図書館や食堂で働いている使い魔たちは主人に捨てられたのだ。

逃がすのはもつたいないので…とアイブたちの雑用に使われている。

アイブの社会は使い魔が回していると言っても過言ではない。

これが使い魔が奴隷といわれる理由だ。

そんな境遇の分、苦勞しているので人の事も親身に考えられるのだらう。

「そうだよな！ありがとう。」

ケイは再度お礼を言ってこの場を辞そうとして、使い魔に呼び止められた。

「あの！…本当は個人情報は漏らしてはいけないのですが、ユウさんも今日ここにいらしましたよ。」

「ユウが？」

今日早く食堂を出たのはここに来るためだったのだ。

ケイは猫の使い魔に対して軽くお辞儀をしてから図書館を後にした。

このとき、ケイの頭がもう少し良かったらなぜ使い魔がユウが来たことを教えたかすぐに理由が分かっただらうに…。

第12話 ケイの岬への道

第12話 ケイの岬への道

記憶の書を借りていったのは誰なんだろうか。

アイブの制服を着ていたとあの使い魔は言ってたけど、制服なんか真面目に着ているアイブはとても少ない。

まあ、その少数派の中に相棒のユウと、ゼルは属しているのだが。

アイブの制服は丈が膝までであって、長くて暑いし、おまけに肘まで隠れるポンチョを上に着るので余計動きにくい。

俺みたいなアイブは動きにくかったら死ぬ可能性がそれだけ増えると言っことだ。

だが、俺も馬鹿ではない。

身の程を弁えてちゃんと動きやすいようにブーツにズボンをしまい込み、上は黒いタンクトップと言う俺としてはこの上なく動きやすい格好をしている。

さて、1冊は本も借りれたことだし落ち着いて読める岬に行くことにしよう。

岬って言うのは昼に俺が考え事をしていた場所だ。

片道徒歩で10分もかかる1本道を通らなきゃあそこにはいけない。

従って静かだし、眺めもいい、しかも誰も来ない。

最初はユウが気に入って寛いでた場所だったんだけど、ユウに引っ付いていくうちに俺も気に入った。

アイブは長距離移動の際、飛んで移動するやつが多いけど、俺は歩くほうが好きだ。

ということで俺は今、岬に向かう細い1本道を歩いている。

ちゃんとりっぱな手すりや道沿いについてはあるが、もしここから『普通の人間』が落ちたら間違えなく即死だろう。

まあ…俺も2年ほど前まではその『普通の人間』だったんだけどな。俺が歩くのが好きなのは、人間だった頃を思い出すし、なんだか今でも自分が昔と全く変わらない『普通の人間』なのじゃないかと思えるからだ。

普通の人間は言うまでもなく、翼もないし飛べもしない。

でも今の自分は悪魔のような翼を持つ、一般人から見ると『化物』と
言う存在だ。

『そんなの酷いだろ！』とは思いますが、仕方が無いのだ。

アイブになる前までの俺はアイブを『化物』と認識したのだから。

そう、アイブになるあの日までは…。

母が再婚し、俺に義父ができた。

明日奈は2人をととも祝福していて、2人をお父さん、お母さんとして歓迎している。

俺もずっとシングルマザーで俺も育ててくれた母を本当は心から祝福しなければいけないのだろう。

母は、『男性とのかかわりは一切なかったのに、気づいたら俺を妊娠していた。』

と俺には話している。

でも、子供と言うのは男女がいて出来るものだというのは子供でも分かる当たり前のことだ。

だからそんなことがありえるわけがない。

母を疑いたくはないが、疑わずにいられないのが人間の嗟嘆だ。

ましてや、それが自分の実の父の事ならばなおさら。

『自分が母の女性としての人生を壊し、幸せを奪ってしまった。』

俺はずっと自分を責め続け、自分を産んでくれた母に感謝すると

もに、常に母の幸せを1番に考えて暮らしているはずだった。

でも、母が結婚し、女性としての幸せを取り戻すことが出来たのに、内面、母を祝福出来ない自分がいる。

別に義父の事が嫌いなわけではなく、むしろ俺にも優しく接してくれるとてもいい人だと思っている。

そう。義父と母には何の問題もないのだ。問題があるのはこの俺自身の心。

…明日奈は関係ない。明日奈はもう、俺の妹として完全に割り切っているのだ。

「桂、明日奈、今日から学校ね。折角同じ学校だから2人と一緒に登校しなさいよ。それにほら、最近色々物騒じゃない？」

母は心配そうに、テレビの『連続殺人事件』の特番を指しながら俺たちに言う。

「わかってるよ、明日奈、行こう。」

「うんー！」

明日奈はかわいらしい笑顔を浮かべ、素直に俺に答えてくれた。

「お母さん、いってきまーす！」

「じゃあ、行ってくるな。」

俺は母に心配を掛けたくない一身上で満面の笑顔を無理やり作る。

俺の出来のいい作り笑顔になど全く気づかず、母は笑顔で俺たちに手を振る。

学校に向かう大通りは桜の蕾が膨らみ、全体がピンクがかっている。

俺は今日から中学2年生だ。

学年が変わると同時に苗字も新しくなる。

今日からは母の再婚相手の男性の苗字を名乗ることになるのだ。

俺たちは今、人通りの多い大通りをゆっくり歩いており、明日奈は俺から少し遅れて歩いている。

「あああああ！！」

いきなり明日奈が奇声をあげたのでびっくりして一気に背筋が伸びた。

俺は、母が心配していたように不審者に会ったのかもしれないと思い、急いで振り返えり、明日奈を見る。

だが、良かったことに明日奈は俯いて固まっているだけだ。

「ふう…そんな声あげて、いったいどうしたんだ？」

俺は安心して肩を落としてから、明日奈にゆっくり歩み寄りながら聞く。

「と、時計が止まったの！たいへん！もう遅刻しちゃう時間だあ
！！」

「ええええ！！」

俺たちはまだまだ時間があると思い、景色を楽しみながらゆっくりと通学していたのだ。

だが、言われて見ると沢山いるはずの同じ中学の制服を着た学生が、もうこの大通りには1人もいない。

俺は決して真面目な生徒ではなかったが、流石に新学年になってしよっぱなから遅刻はしたくない！明日奈がいるならなお更だ。

そのとき、大通りから伸びる細い抜け道が目に入った。

この道は人が全く通らず、俺がいつも遅刻をしたときに愛用（？）している近道だ。

説明する時間も惜しいので、俺は何も言わず、急いで明日奈の手を引き、その近道にはいる。

間に合うだろうか。

そんなことを思いながら明日奈の全速力に合わせて走っていると、何の前触れもなく、俺の握っていた明日奈の小さな手が俺の手の間をすり抜けていった。

明日奈がこけた。

「明日奈！大丈夫か！？」

俺は急いで振り返り、無残にもうつむきに倒れている妹に手を差し出した。

だが、明日奈はうつむきに倒れたまま、ピクリとも反応しない。

反応する代わりに、明日奈の周りに赤い水溜りがゆっくりと広がっていく。

最初はそれがなんだか俺には理解できなかった。

いや、信じる事が出来なかったのだ。

明日奈はこけたのではない。

証拠に明日奈の心臓の辺りに大きな穴が貫通している。

これは血だ。血溜りなのだ！しかもこの血液の主は明日奈だっ。

「明日奈っ！！！」

俺は無我夢中で明日奈を抱き起こす。

明日奈は瞼を閉じ、苦悩の表情を浮かべ、全く動かない。

当たり前だ、明日奈の心臓があるべき場所には大きな穴が開いているのだ。

そのとき、俺の右頬に痛みが走った。

触って確かめると、一筋の切り傷が出来ており、明日奈の比ではないが、血があふれ出している。

右頬の痛みとともに俺に恐怖がはしる。

顔を上げると明日奈の向こうに血で真っ赤になっている何かがいる。

俺は思わず腰を抜かした。

体がなく、角の生えた顔が浮いているのだ。

いや、無いように見えるだけのようだ。こちらに向かってくることに徒歩をする人間と同じように真っ赤な返り血を浴びた顔が揺れている。

どうやら血の掛かったところしか俺には見えていないらしい。

明日奈の血を浴びた顔が悪魔のような笑みを浮かべる。

『逃げなきゃっ！！』

そう思ったが体はただただ震えるだけで、全然言うことを聞いてくれない。

その間も悪魔がゆっくりと近づいてくるっ。

これが今朝特集でやっていた人間の連続殺人鬼だったらまだいくらか希望が持てただろうに。

『もうだめだっ！！』

俺が絶望した瞬間、悪魔の笑顔がいきなり強い苦痛に歪んだ。

そして、苦悩に歪んだ顔は座り込んでいる俺の横に倒れ、砂が風で飛ばされていくように消滅した。

「大丈夫か？」

凜とした声が俺の耳に響く。

その声に答えて顔を上げると、そこにはさっきまでいなかったはずの顔全体を覆う仮面をかぶった金色の髪の毛の黒い翼を持つ化物がいた。化物と言っても、黒い翼以外は普通の外人となんら変わらないので、明日奈を殺したやつよりはかなりマシだ。

それに、左手に黒い血液のような液体がこびりついた剣を持っている。

どうやら、こいつが俺を助けてくれたらしい。

俺は明日奈を抱えた手の震えを懸命に抑えながら答える。

「俺はな…でも明日奈が…！」

俺の言葉を聞いて仮面の男は俺の腕の中の明日奈の亡骸に目を移す。

男は少しうつむいて悲しい声色で言う。

「そうか…。間に合わなくて悪かったな。」

その言葉が引き金になって安堵間と一緒に明日奈の死に対しての悲しみの涙が込み上げてきた。

明日奈を抱きかかえたまままだ温かい体からどんどん体温が無くなっていくのを感じる。

そんな俺を男はしばらくみおろしていたが、やがて、口を開いた。

「ところでお前、10代だよな？」

「へ？」

聞こえていたがあまりにも場違いな質問に俺は思わず聞き返してしまった。

「年齢だ。10代だよな？」

「え!?!…もう少しで14だけど…。」

『妹の死に涙する兄になんてこんな質問をするんだ!』

と怒りを覚えたが、どう考えてもこの20代そこそこの男も人間ではなく、化物だ。

俺は無理やり怒りを抑えたが、次の男の言葉を聞いたらそんなものはどこかに吹き飛んでいた。

「じゃあ、資格は有るな。お前、妹を生き返らせたいか？」

男の言葉に俺は即座に答える。

「当たり前だろう！！頼む、妹を…明日奈を助けてくれ！」

「…お前、自分がこの世から完全に消える覚悟はあるか？」

それから男は口早にアイブの制約について細かいところまで全て語った。

「俺と共に天界に行くか？」

仮面の男は漆黒の翼を道一杯に広げながら俺に手をさしの際はす。

アイブになんかなりたくない。

でも、明日奈を生き返らせるためなら俺は手段を選ばなかった。

少しためらいがちに俺は男の手を取った。

その瞬間、目の前が真っ白になった。

次に目が覚めたとき、そこはさっきの悲劇があつた通路だった。

だが、明日奈の亡骸も血のあとも見受けられない。

「妹は学校に行ったぞ。」

仮面の男が教えてくれた。

よかった…明日奈は生き返ったんだ。

そう思つて胸をなでおろしなのもつかの間、俺は自分の背中に違和感を感じた。

長いかみに何かが引っかかる。

「おめでとう。これでお前も晴れてアイブだ。」

恐る恐る俺は自分の背中を見た。

そこにはさっきまで、自分が化物扱いしていた仮面の男と同じ、
— 対の漆黒の翼があつた。

こうして俺はアイブ^{化物}になった。

第13話 岬に佇む少年

第13話 岬に佇む少年

もう少しで岬に着くので、ケイは回想を打ち切り、足を速めた。

足を速めると、明日奈と歩いた桜の蕾が膨らんだピンクがかった通学路を思い出す。

最後のに過ごした2人の時間を。

目的地である岬の先端が段々見えてきて、ケイは驚いた。

自分たちの特等席のベンチの前に誰かが佇んでいるのだ。

近づぐごとにそのアイブの全貌が見えてきた。

動きにくく、今時誰も着用しない制服を着込み、髪の毛を全て帽子の中にしまいこんでいるケイと同じ年ぐらいの少年のアイブだ。

そのとき、図書館の猫型使い魔の弟の言葉を思い出した。

「ああ！『記憶の書』ですね？運が悪いですねえ。滅多に借りられることのない本なんですがこの図書館にある1冊はついさっき、帽子を深くかぶった制服を着た人が借りていきましたよお。」

『制服に帽子？ちょっとまってよ！あいつ、もしかしてあいつ、図書館の使い魔が言った記憶の書を借りたアイブじゃないか！？』

気持ち昂ったケイはさらに岬の先端に向かう自分の足を早める。

そのアイブが掛けている眼鏡のレンズが月光を受けて白くなっているようにケイの居る場所からは見える。

そのせいで顔はハッキリとは見えない。

そして小柄な少年の左手には古い1冊の本が抱えられている。

『間違えない。』ケイは確信した。あいつが記憶の書を借りたアイブだ。

ケイは少年を観察するのをやめ、走るのに専念する。

『俺にはあの本が必要なんだ。何としても手に入れなくては。ひとまず説得はしてみるが場合によっては……』

ケイは確かに、周りに居るアイブには脳も戦闘能力も劣るが、とても弱いと言っわけではない。

ユウもゼルもミラノも上の中にランクされる上位アイブなのだ。

ケイも中の下と言う決して弱くは無いポジションにいる。

比較するケイの周りにいる人物たちが悪いだけで、全体から見るとケイは決して弱いほうのアイブではないのだ。

ましてや相手は自分と同年ぐらいの少年、ケイは年齢の割にはかなり上の位にいる。(そう言うとユウなんか年齢の割りに超超超上の位なのだ。)

従ってユウ以外の同年代の少年になんて負ける気が全くしない。

それにあのアイブはどこから見ても完璧な頭脳派にケイには見える。
(要するにがり勉タイプだ)

頭じゃ負けるかもしれないが、腕っ節の強さではあの細身のアイブになど決して負けないだろう。

そう思っているうちに、ケイは少年のいる岬の先端まで到達し、足を止めた。

「うるさいな。折角の静かさが台無しじゃないか。」

帽子の少年は相変わらず下を流れていく雲を見つめながら淡々と話す。

ケイなど振り向いて話すのにも値しないとやっているかのようだ。

『この糞餓鬼がつー!』(餓鬼と言っても同い年ぐらいだが。)ケイは唇を噛み締めたが、今すぐにでも殴りかかりたい衝動と体を抑えた。

まずは口で説得してみよう。でもそれでダメだったら容赦はしないが。

ケイはわざと軽い口調で話しかけた。

「あ、悪かったな。ところでもしかして君が図書館で記憶の書を借りた人？」

「そうだったらなんだと言っただ。」

ケイはもう少し補足して、どうにか本を譲ってもらえないか頼むつもりだったが、少年はそんな時間を全く与えず返事をしてきた。

少年はやはり雲から視線を逸らさないが、左手の本の表紙をケイに向けて軽く持ち上げた。

間違えない。ケイの求めている記憶の書そのものだ。

ケイは唾を飲み込む。

「少しでいいから読ませてもらえないかな・・・？」

「やだね。何の義理があつてお前に本を見せなきゃならないんだ。」

さつきと同じ、ケイに補足を入れさせないほどの即答だ。

『初めて会った人物に何と言う物言いだっ。位は俺の方が上（多分）なのだから普通はお前が俺に対して敬語を使わなきゃいけないところだぞっ！！』

少年に対しての怒りはケイの許容範囲を楽々と超えてしまった。

交渉決裂。今すぐボコるっ。

ケイは自分の本をベンチの上に投げて、少年の後姿に向かって思いつきり殴りかかる。

ケイの目には少年の頭に自分の拳がヒットしたように見えたが、肝心の拳には全く手ごたえがない。

そこにいるはずの少年の姿が陽炎のように揺らいで消えた。

ケイが捕らえていたのは少年の残像に過ぎなかったのだ。

いつの間にかケイの背後に移動していた少年がケイの耳元でそつとつぶやく。

「おいおい、乱暴だなあ。それに動きが遅いぞ、技の切れも無い。」

少年の言葉を全て聞き終える前に、ケイは肘鉄を放ったが、そこにあったのはまた少年の残像だけ。

なにか術を使おうかとも思ったが、前にこの少年と同じ、光速を誇るアイブと手合わせをしたことがあり、詠唱が間に合わないことをケイは悟っていた。

そのとき、少年がケイの正面で立ち止まった。

月光が逆光なので、少年の顔は暗くて、全く見えない。

だが、口元がケイを馬鹿にしているかのように微笑しているのだけははっきりと見える。

苛立ったケイは少年の細い足に向かって力一杯の足払いを放つ。

だが、やはり空振りになった。

少年は華麗に高さのあるバク転でケイの足払いをかわし、手すりの上に見事着地した。

体操選手でもこんなにきれいに手すりに着地はできないだろう。

ましてや、ここは失敗したらそのまま地上まで直行の岬の先端だ。

飛べるとはいえ、恐怖が無いわけではない。

その恐怖をふまえてこのバク転を決めることができるとは。

ここに少年の場数の多さを感じることができる。

「これはまあまあだな。んー……30点。」

少年が火に油を注ぐ。ケイはこの少年の言動の全てが気に入らない。

少年はよけるばかりで、ケイに対して全く攻撃してこないし、するつもりも無いのだ。

その証拠に彼の左手には今もケイの狙いである記憶の書が抱えられている。

この態度が人を馬鹿にしているようですます気に入らない。

『こいつー!!ぶっ殺すっ!』

ケイは怒りに任せて少年の顔面めがけて拳を放った。

だが、感情的になってきているせいで動きが単調で読みやすくなってし

まっている。

少年は眉一つ動かさず、体を捻らせただけで簡単に避けてしまった。

ケイは避けられたと分かっても怒りに任せていたため、攻撃に勢いがついてしまい、止めることができない。

次の瞬間、ケイは空中にいた。勢いあまって手すりに足が引っかかり、そのまま柵を越えてしまったのだ。

いきなりケイに恐怖が押し寄せてきた。

『落ちるっ！！』

ケイはすっかり混乱してしまい、自分が飛べることをすら忘れてしまっている。

完全にあきらめ重力に身を任せてしまい、グッと目を瞑る。

だが、誰かの手がケイの腕を抱きつくように掴んでいるため、落ちずに済み、ケイは今宙ぶらりんになっている。

おそるそる目を開け、顔を上げたケイが一番最初に見たものは闇を裂く純白の翼だった。

少年がすばやく動いたため、ずれてしまった眼鏡が少年の顔から離れ、ケイの横を落ちていき、すぐに雲の中に消えて見えなくなってしまう。

続いて風にあおられて少年がかぶっていた帽子が飛ばされ、帽子に

しまいこんでいた銀色の髪が風になびき美しく煌く。

月光に照らされ、宝石のような瞳を持つ、自分が戦っていた少年の顔がくつきりと見えた。

少年は整った顔を歪め、怒鳴る。

「なにやってる、死にたいのかっ！重いからさっさと翼を出せ。」

「ユ、ユウ!？」

今まで戦っていた少年こそ、ケイが手合わせしたことのある高速を誇るアイブ……ユウ本人だったのだ。

第14話 虎穴に入らずんば虎児を得ず（前書き）

この作品を見つけてくれてありがとうございます!!

楽しんでいたださいね

私の書いている小説は

<http://www.geocities.jp/thealcemist295/>

でも読むことができます。

是非遊びにいらしてください。

第14話 虎穴に入らずんば虎兇を得ず

第13話 虎穴に入らずんば虎兇を得ず

ケイが翼を広げ、なんとか2人で陸に戻ったとき、ユウの息使いはかなり荒くなっていた。

無理も無い。自分よりも重いケイの体重を一人で支えていたのだから。

ケイは心配し、大きく上下するユウの背中を見た。純白の翼がユウの背中に吸い込まれる様に消えていく。

アイブの洋服は特別製なので、翼が貫通するようにできているのだが、何回見ても洋服が破れていないのにケイは違和感を感じずにはいられない。

まあ、ユウだけではなく、ケイの服も同じ仕掛けなのだが。

ケイはまだ息使いの荒いユウに肩を貸し、2人で隣り合わせにベンチに座り込み、背もたれにもたれかかる。

幸い、記憶の書はユウがケイを助けに入るとき、ケイの借りた本のうえにユウが投げ出していたため無事だった。

俯いて肩を大きく上下させ、大きな呼吸をしているユウの顔をケイは心配そうに覗き込む。

だがユウは弱っている自分を見られたくないらしい。自分の顔を見

ようとするとケイを右手で頑なに拒む。

なんだか変だ。ケイはユウの左側に座っているのだから左手を使えばいいことなのになぜわざわざ右手を使うのだろうか。

不思議に思ったケイはユウの左手に視線を移す。

見た目では殆ど分からないが、ケイにはピンと来た。

ケイがユウの左手をゆっくり持ち上げるとユウが表情を歪ませる。

ケイの体重を支えた際、筋を痛めたらしい。

「ちょっと、じつとしてるよ。」

そう言うとケイは持っていた飲み水で自分のハンカチをぬらし、それをユウの左手にそっと置いてやった。

「……悪いな。」

やっと呼吸が落ち着いていたユウが弱々しくケイにに微笑んだ。

「全くだ。よくも俺を騙したな。」

ユウはお礼の意味を込めて言ったのだが、ケイはわざと自分が意味を間違えているように振舞う。

ユウがわざわざバツが悪くなるような必要はどこにもないのだ。

その気遣いがユウにも分かったので、ケイの好意に甘えて、わざと

ケイにあわせて話を続ける。

「たまにはできの悪い相棒の実力を試してやろうかと思ったんだよ。」

言葉の後、ユウにしては珍しく声を立てて笑った。

「できが悪くて悪かったなっ！それよりお前、なんで変装なんかしてたんだよ。全く分からなかったぜ。」

「食堂は毎日行くから仕方ないとしても、図書館まで行ってアイブの見世物になんてなりたくないからな。」

ユウの容姿はいい意味でも悪い意味でも、とにかく目立ち、人ごみに出るといつも注目の的になるのだ。

ユウはこれが嫌で堪らなかったのだろう。

ケイは隣に座るユウをを相手にばれないようにちらっと横目で盗み見する。

整った顔立ちをしたこの少年がいったい何をしたというのだ……
・ 最初は少し驚いたが、銀色の髪も紅い瞳も、純白の羽もどこが悪いのか全く分からない。

この少年を気味悪がるのは人の中の醜い嫉妬心からではないのだろうかとケイは思う。

たしかにユウは異端な存在ではあるが、どちらかと言うと、人々はこの少年の才能や美貌に嫉妬心を抱いているのではないだろうか。

そんな嫉妬心を抱く対象なんて数え切れないだろうが、ユウの容姿が変わっていることをいいことに、彼だけを目の敵にしているだけなのでは………？

こんな恥ずかしいことを本人にそのまま話すわけにはいかないが、なにかせめて気の聞いたことを言おうとケイは口を開こうとしたが、先にユウがいつもの憎まれ口を叩いた。

黙っていれば文句無しの美少年なのだが………そう、黙っていれば。

「けど、馬鹿なお前でもたまには調べごとなんてマシなこと思いつくこともあるんだな。」

ケイの考えなど露知らず、いつもどおり憎まれ口を叩き、不敵に笑ってみせる。

「たまにとはなんだ！たまにとは。お前が知らないだけで、俺はいつも自分の溢れんばかりの才能を頭の中だけで押しとどめるのに必死なんだぞっ！」

ケイの芝居がかった物言いにユウも、言った本人も大いに笑った。

「で、お前は何を借りたんだ？」

ユウはケイの隣に積んである本に目を落とす。

ケイは記憶の書の下から自分の借りた本を抜き取り、ユウに投げて寄越したが、投げた後にユウが左手を使えないことを思い出し、ハ

ツとしてケイはユウに急いで視線を移す。

だが、そんな心配は無用だった。

ユウは『なめるなよ。』と言う風にユウは口を綻ばせ、投げられた本を負傷していない右手で受け取り、器用に右手だけでページを開いてみせる。

「……………！」
イゲジステンズフルーフ『存在証明』か。」

ユウは何ページかに目を通した後、顔を上げケイに向けて驚きの表情を見せた。

イゲジステンズフルーフ
存在証明と言うのは人間がアイブの姿を見れるようになる上級クラスの術のことだ。

今まで日本行きの任務が無く、大切な人に会うことの無かったケイには全く無縁だった術である。

彼が借りて来た本はその術の説明やルーンが書いている術書だったのだ。

「いやあ、やつぱり呪文が全部そろったときには自分の手で明日奈に渡したいからな。」

ケイは恥ずかしそうにはにかみながら頭をかく。

「そのことなんだが……………そう簡単にはいかないみたいだ。」

ユウはケイの顔を見ないで済むように、俯いて小声で呟いた。

ケイは驚いたが、一刻も早く話続きを聞きたかったため、黙って体をユウの方に向け次の言葉を待つ。

そんな落ち着いたケイを見て、ユウは緊迫した声でゆっくりと自分の考えを語りだした。

「おかしいと思わないか。沢山の犠牲が出たと言うのになぜ上層部はクロの正体を知らなかったんだ？普通なら龍の正体を調べて、上位アイブの特別任務に指定するはずだ。

なのに今回はそうしなかった……多分俺が思うに、上層部はクロの正体を知っていたんだと思う。」

「っ!!！」

大きく目を見開いたケイを見てはいたが、ユウはあえてそのまま話し続ける。

「知っていたのにあえて上層部はそのまま一般任務に部類していた……まるでクロに会ったヤツに人間に戻れと言っているかのように。理由はまだ分からないが、そんなことをさせられる権力を持っているアイブは1人だけだ。

アイブのトップ、ジョーカー。こいつが絡んでるのならセツトでもれなくジョーカーの3人の配下、スリーカードも今回の件に絡んでいるのはまず間違えない。」

「ジョーカーは知ってるけど、スリーカードって……唯一上の上に部類されているアイブ3人だよなっ！ユウより強いやつらが絡んでるのかよ!？」

ケイは思わずベンチから立ち上がり、座ったままのユウの正面に回りこみ、ユウの表情を伺う。

ユウは軽く頷く。動揺している様子などは微塵も無く、いつものポーカーフェイスのままケイと目を合わせ、次の言葉を待っている。

「……えーっと、こういうの何って言うんだっけ？こけ……」

「虎穴に入らずんば虎児を得ず。か？」

「そう！それだよ。畏だと分かってるけど、やっぱり俺は目の前の可能性を諦めたくない。」

ケイは堅く拳を握り締め、いつにも無く真面目な表情で言う。

そんなケイを見てユウのポーカーフェイスが解けた。

ユウは呆れたように目を瞑むり、肩をすくめたが口元が微笑している。

「やっぱりお前って変なヤツだな。俺も同意見、思いついた言葉まで同じだよ。虎はお前が思っている以上に強大かつ凶暴だ。覚悟はできるか？」

「俺は勿論できてる。でも……ユウ、こんなことにお前まで無理やり巻き込むつもりは無い。お前が望むならコンビを解消……っ！！」

『コンビを解消』のところでユウがいきなりベンチから立ち上がり、右手の本でケイの後頭部を思いっきりどやしつけた。

これが本当に容赦ない一撃で、ケイは頭がくらぐらし、しりもちをついてしまった。

ケイの頭がはつきりするのを待たず、ユウはケイを見下ろす形で怒鳴り始める。

「この馬鹿っ！お前みたいなひよっ子がいったい一人で何ができるんだ！？『巻き込むつもりは無い。』だって？遅いつ。俺はもう十分お前の馬鹿ぶりに巻き込まれてるんだよ！それなのに今頃コンビ解消なんて言いやがって！」

ここでユウは大きく呼吸をする。勢いで怒鳴って言ったため、台詞の間ずっと息を止めていたのだ。

そして最後に付け足すように言う。

「今更抜ける気なんて更々無いね。」

ユウはいつもと同じ不敵な笑みを浮かべる。それにつられたケイも思わずユウに微笑む。

「よし！じゃあそいつらの思惑にはまってやるうじやないかつ。でも最後に勝つのは俺たちだっ！！！」

ケイは拳を空に突き上げた。

再びベンチに腰をかけたケイに、隣に座ったユウが話しかけた。

「なあ、……答えたくなければ答えなくてもいいから、1つだけ聞いていいか？」

「？ああ。何でも答えるぜ？」

ユウとの絆を再認識したばかりのケイは全くためらい無く言う。

「今日の昼間、お前は自分のことを『黒森 桂』って言ってたけど、お前の妹の名前は確か……。」

「……高倉 明日奈』だ。俺も『高倉 桂』になる予定だった。」

そこまで言うとケイは漆黒の空に光る星を見つめ始める。

「明日奈は俺の新しい親父の連れ子なんだ。だから俺とは血が繋がってない。」

「じゃあ、お前は血の繋がっていない妹のために……。」

「そう、あいつのためにアイブになった。俺と明日奈は元々知り合いで、お袋とあいつの親父が再婚するって初めて聞いたときは驚いたなあ。それに、超シヨックだった。」

ユウは腕を組み、しばらく考え込んだが、ストレートに聞いてみた。

「お前、もしかしてその子のこと好きだったのか？」

「あたり、やっぱりお前に隠し事はできないな。今は全然好きじゃないって言ったら嘘になるけど、もう昔の事さ。」

ケイは気さくに笑ってみせる。

そんな笑顔の中に寂しさを感じたユウは何か言おうとしたが、どれも言葉にならない。

「さあ、もう遅いし本を読むのは明日にするか！帰ろうぜ。」

何も無かったかのようにケイが言う。無論、ユウに気を回したのだ。

2人は徒歩で帰る間、人間に戻るためにどうすれば敵の目を欺けるか話し続け、明日奈の話題には一切触れなかった。

部屋のベットに倒れこんだケイは柄にも無く、『カミサマ』などに祈った。

『俺が人間に戻れますように。明日奈にまた会えますように。そして……俺にユウと言う最高の相棒を与えてくれてとても感謝しています。』

ケイがそんなことを思っていることなど露知らず、ユウは隣のベットで健やかな寝息を立てている。

いろいろなことがありすぎて、思い出しきれないほどの容量があっ

た今日と言つ日の暮がケイの目蓋と共にやつと降りた。

第15話 穏やかな朝

第15話 穏やかな朝

窓から射す淡い陽ざしに射されてケイは1度ゆっくりと目を開けたが、眠気に負け、もう一度目を瞑る。

ケイは実に楽しい夢を見ていた。黒龍なるものが現れ、自分が人間に戻る可能性を示すと言うとてもファンタジーな愉快な夢を。

また夢の入り口に立った、ケイの腹部に走った激しい痛みが、ケイを現実に戻した。

「っ!!」

ケイは痛みのあまり、無意識にベッドの上で上体を起こした。

窓から入ってくる心地よい風にケイの長髪が軽くなびく。

天界は、全ての島に形の無いシールドが張っており、気候や天気をアイブが司っているのである。

なので殆どの日は快適な気候なのである。

ケイは自分のベッドでもう一人茶色の髪の子が眠っていることに気づいた。

無論、黒龍のクロだ。その寝顔からは昨日ユウにつけられた傷は跡形も無くなっていた。

ケイは健やかなクロの寝息を聞いて安心した。

『あれは夢なんかじゃなくて、現実なんだ。．．．そして、この痛みは昨日、ユウに食らわされたみぞおち右ストレートの痛みだ。』

ケイは腹部を押さえながら歯を食いしばり、サッとユウに顔を向ける。

いつもはケイよりも早く起きているユウだが、今日は珍しく、まだ隣のベッドで静かに寝息を立てている。

その寝顔と言ったら．．．人形顔負けの美少年、いや美少女にすら見えてしまう。

ユウはたしかに綺麗ではあるが、本人の手前、見入るなんてことは普段は絶対にならないが、いつもケイはこの寝顔にだけには見入ってしまう。

枕もとの小さな窓のカーテンが風になびき、そこから差し込んでくる光に答えるかのように銀色の肩にかかるほどの長さの髪が美しく輝いている。

そんなユウが小さく口を開いた。

「かが．．．。」

眠っているユウがいきなり呟いたのでケイは人形が喋ったかのようにびっくりして、ベッドから立ち上がる。

だが、これは寝言のようだ。盗み聞きはいけないとは思ったが、ケイは好奇心に勝てず、聞き耳を立てる。

「ケイの　　かが・・・・・・・・。」

ケイは、なぜか真っ赤に赤面してしまった。

彼の周りには女っ気が全く無い（ミラノ、アレは女なんかじゃないっ）ので、正直に言っているとケイの周りで一番綺麗・・・・可愛いのは悔しいことに、この少年、ユウなのである。（こんな悲しいことがあるだろうか）

ケイはユウの寝言に自分の名前が出てくるとますます気になり、ついにはそつとユウの眠っているベットに座わり、再び聞き耳を立てる。今度こそ盗み聞きの詳細は万端である。

ここまで近づくとユウの整った顔の長いまつげの一本一本まではつきりと見ることが出来る。

こんなに近距離で見ても、欠点一つも見つからないユウの優良な容姿に、ケイは改めて感心した。

ユウは男だが、赤面するほど可愛らしいのは相棒のケイですら認めざる終えない。

この小柄な美少年が本当にあの強力な右ストレートを自分のみぞおちに撃つたのだろうか・・・・・・・・。

だが、確かにケイの腹部はまだ少し痛む。

ケイがそんな疑いまで持ち始めたとき、彼の疑問に答えるような行動をユウが起こした。

ユウの寝言は、今度ははっきりとケイの耳に届いた。

これはもう寝言と言うか、叫びの部類だった。

「ケイの糞馬鹿がつっー！ー！ー！」

「えっ！な……くおばっ！？」

ユウはケイの顎に容赦ない蹴りをお見舞いした。

ケイの最後の尾語は彼の意味ではない。ユウの蹴りが見事に顎に入り、舌を噛んでしまったのだ。

この変なやり取りのせいでケイのベッドでぐっすりと寝ていたクロは目を覚まし、あっけらかんとしてベッドの上から2人を見比べている。

ベッドの上で状態を起こしたユウは低血圧のため、まだボーっとしているが、ケイの姿を見つけると、ゆっくりと口を開いた。

「……ん？あ、おはよう。」

痛みあまり、座っていたベッドから転げ落ちて悶絶するケイに、強力な蹴りをお見舞いした本人が拍子外れの声で話しかける。

『なにかあったの？』とでも言う様にユウはポカンとした表情を浮

かべている。

ケイは悟った。正真正銘ユウは、この瞬間起きたばかりなのだ。

証拠に、ユウはまだ視界のピントが合わず、目を擦っている。

あの罵倒も、強力な蹴りも全ては寝ぼけている間の無意識のうちの行動だったらしい。

意識があるうちの行動でもシヨックだったとは思うが、意識が無いうちの行動だったのは更にシヨックである。

ユウは愉快(?)なことに、寝ぼけていても無意識のうちに相棒をけなしていたのだ。

『この悪魔の寝顔に見とれたりした俺が馬鹿だったっ!』

幸いにも、他の2人はこの出来事については何も知らない。

ケイはこの事を自分の胸の中にしまっておくことにした。

寝ぼけたユウに蹴られて悶絶している。なんてかつこ悪いケイにが言える分けない。

ユウは相変わらずポカンとしたままだったが、しばらくして顔がシヤキツとしてきて床でうずくまって悶絶しているケイを見て、得意の憎まれ口を叩く。

「・・・お前、昨日食いすぎたんじゃないか? 像も真っ青の食いつぶりだったからな。」

この状況を見たユウは相棒が腹痛を起こしていると判断したらしい。ユウとクロは大いに笑っているが、恥ずかしい思いをしているケイは否定したくても、否定できない。

痛みに耐えるのに必死で反論する余力も無いのだ。

『くそっ！！ユウめ……。』

非のつけようの無い容姿を持っているが、それを帳消しにするほど口が悪いのがこのユウと言う少年である。

結局ケイは食べ過ぎの腹痛と言う情け無い烙印を押されたが、寝ぼけた相棒に顎を蹴られた大馬鹿者よりは遙かにマシだ。

どうにか立ち直ったケイは、寝間着のまま昨日食堂からくすねておいた野菜や食パンで3人の朝食を作った。

キッチンはアイブの間では贅沢品であり、上級アイブの個室にしかないのだ。

……実はこの部屋は2人の自室と言うことにしているが、実際は上級アイブであるユウの個室なのである。

ユウと組んだ当初、ケイは成り立てはやはやの新米アイブであり、無論最下位のアイブだった。

個室が与えられるのは中級からであり、下級アイブは皆、狭い6人部屋を使っている。

だが、ユウは当時からこの上級アイブ専用の広い個室を持っていたため、ケイはそこに転がり込んだのだ。

そのまま居心地がよくなってしまい、ケイは新しい部屋には移らず、そのままこの1人では広すぎるユウの部屋で2人、仲良く（はないか）暮らしている。

ユウは人前に出ることを極度に嫌い、殆ど食堂に行かないので、ケイはいつも食堂から食材を買ってきてこの部屋で料理を作っているのだ。

元々母子家庭だったケイは、料理は嫌いじゃなかったのですが、今ではプロですら舌を巻くほどの腕前だ。

ケイが慣れた手つきで目玉焼きを3つに分け、食器に盛っているとシャワーを浴びて目が覚めたユウが声をかけた。

「お前、まだ昨日俺が殴ったところが痛むんだろ？全く、ひ弱なヤツだ。クロに見てもらえよ。こいつ治療能力を上げる術が使えるんだ。」

そう言つて、タオルで髪を拭きながらユウはケイに昨日痛めたはずの左手を滑らかに動かしてみせた。

ケイが調理している間に治療してもらったらしい。ケイはそんなユウを少し見直した。

『俺のこと心配するなんていいトコあるじゃん！一言余計だけど・・・あれ、なんでこいつ殴られたところが痛むって分かったんだ・・・』

・・・？』

ケイはタンクトップ姿のユウの顔を見る。

そんなケイの疑問なんてお見通しのユウは答える代わりに、馬鹿な相棒に不敵な笑みを作ってみせる。

付き合いの長いケイにはそれだけで十分すぎるほどよく分かった。

『こいつ俺が腹痛なんかじゃないって分かってたのかよっ！！』

クロは意味が全く分からないので、ベットに座って大きく首を傾げるばかりだ。

ケイはなんだかとてもバツが悪かったが、痛むものはやはり痛むのである。

素直に調理を中断して、クロの隣に座って言う。

「じゃあ、頼むよ。」

「よし、1回100円な。」

クロの冗談に皆が少し笑った後、クロはベットから降りて少しががんでケイの腹部に小さな両手を当てる。

クロが短いルーンを詠唱し終わると一瞬柔らかな青い光がケイを包み、消えた。

外見からは何も変わったようには見えないが、痛んだ腹部が全く痛

まなくなり、ポカポカと温かい。

「はい、終わり。具合にもよるけど30分くらいで患部の発熱も熱治まるよ。」

「ありがとう！」

ケイが微笑むとクロもあどけない幼い笑顔を返してくれた。（まあ、クロのほうが年上なんだけど）

「俺なんか5分で収まったぜ。」

壁にもたれて腕を組んでいるユウは、左手を軽く振ってみせる。

「お、お前が5分なら俺は3分だっ！！！」

ケイは無意識に馬鹿な宣戦布告をしてしまった。それを一番後悔したのは言ってしまった後の本人である。

このケイと言う少年は実はかなりの負けず嫌いなのだ。

ユウ以外の人物に負けを認めたことの無いほどだ。

だが、今回はその性格が裏目に出ることとなった。

クロはケイに対して、呆れ顔を浮かべながらゆっくりと朝食の並べられた食卓の席につき、ケイに言う。

「……おいおい、そういう問題じゃなくて……こんなところで張り合っても意味無いだろう。」

「同感。」

クロに続いて食卓についたユウが自分の発言に大いに後悔しているケイに追い討ちをかける。

ケイは顔を茹蛸のように真っ赤にして、そのまま部屋の端に膝を抱えて拗ねてしまった。

この少年は見かけはちゃんと16歳だが、中身はどうなのだか。

それから、ケイはどうしようもない後悔の念と恥ずかしいのとで、穴があつたら入りたい気持ちでしばらく部屋の端で丸まっていたのだが、あとの2人はせせら笑いをしながら部屋の端のケイを完全無視して、朝食に舌鼓を打っている。

ケイは無性に腹が立ったので、つかつかと食卓に向かい、椅子が2つしかない(2つとも占領済み)ので立ったままで自分の作った朝食をすごい勢いで頬張る。

この気持ちを晴らすには食欲しかないと思つたらしい。

普段はこんな些細な事で食欲に走つたりはしないのだが、昨日からいろいろありすぎてケイはかなり混乱しているのだ。

ユウとクロは顔を見合せて、また笑つたが、ケイはそれにも気づかないほど食欲に走っている。

朝食を全て平らげ、やっと落ち着いて団欒を楽しんでいた3人のところに1人の女性が訪ねてきた。

この人物のせいで、平和な団欒の楽しい時間は一瞬で崩れた。

女性と言えばアイブの知り合いの仲ではあの人だけである。

いつも通り、ゴスロリのフリフリとした服に身を包んだミラノが、ノックもせずにミサイルのような勢いで部屋に突入してきたのだ。

ケイとユウ、そしてクロの唯一の共通の弱点であるこの女性は今、不動明王も真つ青の恐ろしい形相をクロを除いた2人、つまりケイとユウに向けているのである。

クロは『とばっちりを食らわないうちに……』と言う感じに急いで席から立ち、ケイが拗ねていた部屋の端に急いで避難する。

『裏切り者……っ!!』

とケイとユウはクロを見たが、クロはわざとらしくよそ見をして、優雅に口笛など吹いている。

いつかの仕返しのもりのようだ。だがケイとユウはクロを責める気にはなれない。

自分がクロの立場だったらまず助けたりはしないからだ。

それに、クロは部屋の隅にいてもやはりミラノに怯えているのだ。

ケイは諦めて、さっきまでクロが座っていた席につき、ユウと向かい合う。

向かい合った2人とも無理に笑顔を作ろうとしているが、ポーカーフェイスを得意とするユウですら笑顔が強張っており、体が小刻みに震えている。

ユウがその有様なのだから、ケイがそれ以上なのは言うまでもない。

一樣口は笑っているが、引きつっているし今にも泣き出しそうな顔をして体を震わせている。

この2人を一瞬でこんなにしてしまう恐怖の女王が口を開いた。

第16話 癖有る男女

第16話 癖有る男女

「ねえ、ユウ君 昨日貸した帽子と眼鏡無くしたって、本当なのお？」

そう言いながらミラノはケイとユウに1枚の紙を突き出す。

声はいつもの甘ったるい声だが、顔とは全く合っていない。

この紙は、昨日部屋に帰る前にユウが一筆書いてミラノの部屋の郵便受けに入れたものである。

ユウは書いてすぐ投函してしまったので、ケイは全く目を通すことが出来なかった。

ケイは、昨日読めなかったその内容を読んだ。

ミラノへ。

悪い、借りてた道具なくしちゃった。

今度埋め合わせする。

ユウより。

短い文章だったため、ケイは一瞬で読み終え、今の状況を理解することが出来た。

つまり、昨日ユウが変装に使っていた帽子と眼鏡はミラノからの借り物だったのだ。

それを落としてしまったユウは『いつかはばれるのだから早いうちに…。』と思い、帰りにミラノの部屋の郵便受けに手紙を投函したのだ。

そして、手紙に書いた『埋め合わせ』が今日来たのだ。

ユウは、覚悟はしていたがそれでもミラノがおっかないことには変わりはないらしい。

かすかに震える声でミラノの問いに答える。

「わ、悪かった。弁償するからさ…。」

ユウの引きつった笑顔がさらにケイの同情を誘い、ケイは急いで哀れな相棒を弁護しに回る。

「いや、あの、ユウだけが悪いんじゃないんだ。俺にも責任はあって・・・俺が驚かせちゃったから...てか、俺のせいかもしれないし。だからさ。」

話しながらミラノの視線を浴びたケイは、だんだん話す声が小さくなり、最後の方は何を言っているか他の3人には聞き取れなくなっ

てしまった。

そんな子供のようにもじもじと話すケイに、ミラノは、今までの形相が嘘のような上機嫌な満面の笑みを浮かべて言う。

「あらあ ケイ君は優しいのねえ。でも安心してえ、弁償しろなんていわないからあ。その代わり、手伝って欲しい任務があるのケイ君にも責任があるんだったら、2人ともに手伝って貰おうかしらあ！」

「任務？お前らが手伝って欲しいなんて珍しいな。」

やっといつもの冷静な状態に戻ったユウが、安心して胸を撫で下ろしながらミラノに聞く。

「ええ、いつもの任務なら2人に頼んだりしないんだけどあ、今回は特別任務を受けようと思ってるの。」

ケイとユウは大きく目を見開いてニコニコと話すミラノを見る。

特別任務と言うのは、いつもアイブが受けている普通の任務とは違う上級アイブがいるチームしか受けられない難易度S級の任務だ。

ケイとユウが驚いたのは、普段特別任務を好き好んで受けるようなアイブは滅多にいないし、ミラノとゼルは多数派に入っているはずだったからだ。

ケイもユウもミラノたちの意図が分からず、ただ困惑している。

「なんで特別任務なんか受けるのさ？」

ケイは顔をしかめながら首を傾げた。

「えー だってこの任務すごくコレが良いのよあ〜。」

そう言ってミラノすごく嬉しそうにクスクスと笑い、は親指の先と人差し指の先を引っ付ける。

2人は通常任務と特別任務の最大の違いを思い出し、ケイなんて思わず小さく声を上げてしまった。

「・・・金が欲しいのか。…生活難か？」

ユウが両手を椅子の後ろに回し、自分の体を楽な体勢に変えてから言った。

そう、お金。特別任務では通常任務の比ではないほどの高額な報酬が出るのだ。

アイブは洋服や食事、術の道具など生活必需品以外は人間界で購入する。

通常任務だけを受けていると、任務の回数にもよるがアイブの組織に食事代を収め、任務に必要な道具を天界で買い求めたら、だいたいそれだけで金は全部飛んで行ってしまふのだ。

この事をふまえてケイは再び目の前のミラノの格好を見る。

どう考えても自分でつけたとしか思えないレースが背中以外にたっぷりと付いたゴスロリの服に、（レースは自己負担だろう）天界の

市場では絶対に売っていない飾りの沢山付いた靴や帽子、高そうな
装飾品……特に胸元に光る黒薔薇のネックレスなど、人間界に
売っているのかすら疑ってしまうような豪華さで、ケイから見たら
変（良く言うと個人的）なデザインである。

『なるほど。こりゃ生活難にもなるわな。』

そう思い、ケイは視線を机の上に戻し、頬杖をついて大きなため息
を吐く。

「だってえ、ユウ君が無くした帽子だって人間界で買ってきたばか
りでこれから飾りをつけようと思ってたところだったのよお？女の
子にお洒落するなって言うほうが無理なのよ」

「……何処に女の子がいるんだ。」

ケイがぼそつと呟いた次の瞬間、ケイの体は椅子ごと宙に浮いてい
た。

そして、すごい音と痛みと共に派手に床に落ちる。

ミラノが全く笑顔を絶やさず、今朝ユウに殴られたのと同じ顎の下
に目にも留まらぬ速さでアッパーを打ち込んだのである。

虫の息のケイにクロが急いで駆け寄り、半ベソを書きながらケイの
体を揺すり、急いで反応がないケイの治療を始める。

何度間違えを繰り返しても、教訓を得られないのがケイと言う少年
の悲しいところである。

そんな相棒を横目で見て、ユウは身を引き締めて話を続ける。

「で、どんな任務なんだ？もしかしてまた討伐任務とか言わないだろうな。」

「安心してえ。今回の任務はなんと……！パーティーに出席よお。」

自分の聞き間違いかと思い、お互いの顔を見合わせるが、全員同じ顔をしているので、聞き間違えでは無いことを確信する。

「パーティーっ!？」

3人がいつせいに聞き返した。

だが、ミラノは全く関係のない意味が分からない言葉を吐く。

「花の都パリで花のような私を取り合う男たち……ああ……」

ミラノは幸せそうに目を瞑む。既にパーティーまで心が飛んでいってしまったっているようだ。

「俺が説明したるわあ。」

ミラノが開けっ放しにしていた扉から颯爽とゼルが入ってきた。

普通に見たら格好良く見えるのだが、この男もクロと一緒にミラノの怒りが静まるまで扉の向こうで非難してた口だ。

そう思うといくら格好つけていても全く格好良く思えない。

そんな視線を本人は感じてはいたものの、軽く咳払いしただけで、無視して話始めた。

「今回はパリの極秘で行われる世界サミットのパーティーに参加するのが任務や。かなり異質な任務やと思うけど、今回の任務は人間の間の情報を探るのが目的やからサミットの参加者が参加しているパーティーは情報を集めるのにはもってこいなんや。重要な任務と言うことで特別任務に指定されとるだけで簡単な任務や。」

「へえ、人間のパーティーかあ。でも、簡単なら俺たちは行かなくていいんじゃないの？」

ケイが言い終わると同時に、ユウもゼルに質問する。

「そうだ。それに人間のパーティーに参加して情報収集なんて任務聞いたことが無い。・・・何か隠してないか？」

それを聞いたゼルは気さくに笑ってユウを茶化す。

「ああ、昨日ケイの買いだめのお菓子全部持って帰ったことかいな？」

「ええええええっ！！！」

ゼルの言葉を聞いたケイは飛び上がり、自分のベットの下のにあるお菓子入れが空になっているのを確認してガツクリと肩を落とした。

この様子ならもうミラノに殴られた場所も完治してしまったようだ。

「そんなことじゃなくて……。」

「！もしかしてこの前、共同でやった任務の報酬ちよるまかしたのばれたか……？」

ゼルはユウから目を逸らして大袈裟に驚いて見せた。

この行動でユウのただでも小さい堪忍袋の緒が切れた。

椅子から立ち上がったかと思うと、つかつかとゼルの前まで歩き、背伸びをして強引に両手でグツとゼルの顔を自分の方に向ける。

「茶化すなこの馬鹿がっ！！この任務、なにかあるんだろ！？」

ゼルは大きく目を見開いてユウを見てから小さくため息をつき、両手でユウをなだめる。

「分かつとるわ、やっぱり俺はお前にだけは隠し事は出来んな。……人間がやばいことに気づいたらしいんや。」

ゼルは、珍しく真面目な顔をして自分の顔から手を離し、直立しているユウの肩にそっと手を置く。

「やばいこと……。」

大切なお菓子をゼルに取られ、目に薄っすらと涙を浮かべているケイがクロと一緒にユウの隣まで歩いてきて不機嫌に聞く。

「人間がアイブの存在を確信したらしいんや。」

「!???」

3人は動揺を隠せなかった。アイブは人間がこの世界に生まれた時から存在し、決して人間に知られることの無かった秘密の集団であり、これからも存在を秘密にしていっては駄目だのだ。

言葉が出ない3人の代わりにゼルが口を開き、詳細を説明する。

「アイブが視える男がいるらしいんや。そいつをがアイブの会話を聞いて俺たちを異世界人かなにかと勘違いしとってなあ。それに、サーモグラフィーにアイブが何度か写ってしまったりしてるのもあって、自分たちの生物としての地位が揺らぐのを恐れている人間たちは、急遽『地球防衛』の極秘サミットを開くって訳や。」

「今回の任務はあ、人間たちが何処までアイブのことを知っているのかの探りを入れる調査名によお。」

やっとこっちの世界(?)に戻ってきたミラノが付け足した。

「それでも、正体がばれることなんてまずないんだから、お前ら2人で行ってくればいいんじゃないのか?」

クロは首を傾げて言う。ケイとユウも同感である。

ゼルはその質問を聞いて苦笑いを浮かべた。

「あー……実はなあ、パーティーに参加するお偉いさんの親戚の名義か女性2人分しか手に入らんかったんや。」

「女性2人って……1人はミラノとして、もう1人はどうするのさ？」

「やからお前らに手伝ってもらいたいんや。」

ゼルは相変わらず苦笑いを浮かべながら両手を合わせる。

「も、もしかしてっ!!！」

「そう、お前らどちらか女装してミラノと一緒にパーティー会場に潜入して来てくれやっ!!！」

『冗談じゃないっ!!』 そう思ったケイは無意識に隣を見たが、そこにはもうユウの姿は無く、ユウはミラノに床に押さえつけられて身動きが取れなくなっている。

察しの良いユウはもうとつくに話の落ちに気づいており、ケイが話している途中に1人逃走を計ろうとしてあっけなくミラノに捕まったのだ。

光速と言われるほどの速さを誇るユウを捕獲できるのはこの世の中にもこの恐ろしく勘のいいミラノ以外にいないだろう。

「ユウ!! お前俺を置いて1人で逃げるつもりだったのかよっ、卑怯者おー。」

「喧しい! こうなったら逃げた者勝ちなんだよ、とにかく俺は絶対にやらないからなっつ。」

ユウは床に押さえつけられたまま、じたばたしながら叫ぶ。

「俺だつてやだよつ、ゼルがすればいいじゃないか！」

「あかん、あかん。俺みたいな長身の男が女装なんて出来るわけないやろ。」

この醜い擦り付け合なすりいは10分ほど続き、最後にはクロにまで擦り付けようとしたほど男衆は女装を嫌がった。

その間、ミラノはずっと楽しそうにニコニコしているだけだった。

だが、結局口の達者な2人には勝てず、この役はケイのものとなった。

決め手になったのはユウの

「変装道具の紛失は『俺にも責任はあつて……』つて言つてたじゃないかっ。全部お前の責任だろこの馬鹿野郎っ、責任取れ！！」

と言つ言葉だった。

昨日の事では後ろめたいことが多いケイは言い返す事が出来ず、そのまま擦り付けられたのだ。

「じゃあ、ゼルとユウ君とクロちゃんは今会場の外で待機ねえ。パーティーは今日の夜だから、それぞれ準備を整えておいてねえ。ケイ君は出発の前に私の部屋で着替えること！」

ミラノがてきぱきと指示を出している間にケイは重大なこと思い出

した。

「ちょっと待て！俺イグジステンスブルーフ存在証明の術まだ使えないんだけどっ！？」

それを聞いたゼルがにっこりと不気味な笑みを浮かべた。

「そうかいなあ。丁度いいわ、ケイ、安心せい。俺の新しく発明した訓練マシン・『術10倍速度習得クン』の第一号の体験者にし
てやるわあ。」

ゼルは重度のメカオタクなのだ。

『それって実験体って言うんじゃない……』とケイは思ったが、
ゼルにいきなりハンカチに含ませた変な薬品をかがされ、力が入ら
なったところをゼルに担ぎ上げられた。

『俺の知り合いは何で皆、人を無理やり拉致るんだっ！』とケイ
は叫びたかったが、意識が遠のいてゆく。

哀れなケイが最後に見たのは手を振ってゼルとミラノ、そして自分
を手を振って見送るユウのク口の裏切り者2人組だった。

第17話 隠された暗号

第17話 隠された暗号

ケイが拉致（？）された後、ユウは部屋で記憶の書を読み直していた。

相棒が連れ去られて、1人で静かに部屋で過ごすのはこれが初めてではないし、今回はクロも一緒だ。

それに、酷い目にあっただとしてもケイが生きて帰って来ないことは多分無いので、ユウはとても落ち着いて読書にいそしむことが出来た。

もうかれこれ3時間、椅子に座ったまままで読み続けているので、流石のユウの表情にも疲れが見られる。

だが、ユウの努力も虚しく、どんなに読み進めて行ってもユウが望んでいる新しい情報は見当たらない。

ユウは残りのページ数が減るたびに落胆の色を隠せなかった。

実は、ケイが連れ去られた後ユウが聞いてみたのだが、クロは呪文のありかについて何も知らなかったのだ。

なのでユウは呪文のありかに関する手がかりを、この記憶の書の文面に求める以外なく、昔読んだ記憶の書をもう1度読み直しているのだ。

『なんとしても呪文のありか突き止めなくては…。』

そんな思いを胸に、ユウはゆっくりと最後のページをめくる。

だが、めくると同時にユウが大きく肩を落としたのはベットに座って、特に何もすることが無く足をぶらぶらさせていたクロにも分かった。

最後の希望をかけたページは、まっさらな白紙だったのだ。

「…どうした？」

落胆したユウにクロが駆け寄っていき、ユウの手の中にある本を覗き込んだ。

白紙のページを見たクロは瞬時にユウの立たされている状況を理解することが出来た。

「お手上げだ。なんにも得られる情報が無かった。」

その言葉がクロの考え確かなものにした。

ユウは唇を噛む。

「そうか…呪文の在り処が分からなきゃいくらお前らでも…」

クロは顔を上げて、未だ諦めきれず白紙のページを見つめるユウを見る。

だが、ユウは何も言わなかった。

クロにもケイを大切に思う気持ちは芽生えている。

だから、相棒思いのユウの悔しい気持ちが痛いほど伝わってきた。

なので、クロもそれ以上追求はしなかったし、したくても出来なかった。

暗い表情を浮かべるユウを見るのに絶えかねて、クロは再び白紙のページに目を落とす。

だが、ユウは諦めてはおらず、絶望しながらも、頭の隅では必死に考えていた。

何の意味も無いページなどあるわけが無い。

だからこのページにもなんか意味があるはず…と。

そんな時、記憶の書の白紙のページに1粒の滴が落ちてきた。

ユウは何事かと思い、急いで顔を上げる。

ユウの目に入ったのは、立ったまま涙を流すクロの姿だった。

「どうした！？なんで泣っ…また氷が溶けてるのか？」

ユウは気を回しながらも、クロのいきなりの涙に慌てふためいている。

こんなにあたふたとユウを歳相応の少年らしく慌てさせれるのは、

クロぐらいだろう。

このとき、クロが泣いている理由が分かったのは世界に1人、クロ本人しかいなかった。

クロはただ、無性に悲しくなったのだ。

『この2人は俺が助けてやると決めたのにつ!!』

何も出来ない自分が腹立たしい。

自分の氷を溶かしてくれた少年たちに何かしてあげたいが、どうすればいいのだろうか？

目の前の少年を笑顔変える方法なんて、どうしても思いつくことが出来ないのだ。

自分の無力さを思い知ったクロは、自然と目が潤んで来る。

だが、この時俯いてページを見つめ続けていたユウはそれに全く気づかなかった。

それに、ユウは周りが気にならなくなるぐらい自分の考えに集中していたのだ。

「クロ…?」

ユウはクロをなだめようと、手を本から離してクロの頭を撫でようとした。

しかし、ユウの手は、クロの頭まで届かなかった。

ガシャツ。

これはユウが手を引っ掛けてしまった机の上のインク壺がユウとクロの間の床に落ちた音だ。

「げっ！悪い、クロ。汚れなかったか？すぐ布巾持ってくるからっ
！」

ユウは席を立ち、自分の座っていた椅子に白紙のページを開いたままの記憶の書をやや乱雑に置いて、振り向きもせず急ぎ足で水周りに向かって行った。

30秒もしない内にユウは布巾を片手にとんぼ返りしてきた。

そして、有無を言わさない速度で膝をつき、インクを落としたカーペットにそれを押し付ける。

幸いにも、インクの残量が少量だったのと、カーペットが黒かったのとで殆ど目立つ染みにはならないだろう。

「ふう。」

そこでやっと一息ついたユウは顔を上げてクロの顔を見る。

クロはまだ泣いてはいるが、なぜか大きく目をを開いて瞬きしている。

瞬きする度に頬には涙の筋が出来る。

クロはまだ涙を流してはいるが、この顔は、さっきまでの悲しみの表情と同じものなどでは無い。

驚きの表情だ。

「あ、アレ……。」

クロは呟いて椅子のほうを指差す。

その方向を見たユウは、驚いてクロと同じように目を大きく見開き、まるでクロのモノマネをしているかようになった。

椅子の上に置いてある記憶の書の白紙のページに、ユウが気づかないうちに落ちたインクが、勝手に移動し、虫が動くかのように文字が浮かんでいるのだ。

ユウは急いで本を手に取り、その文字を読む。

内容はこうだ。

” 紅き滴を啜り生きる者。その長老者のみぞが最初の呪文を知る。”

2人が文面を読み終えると、すぐに文字は端から白くなり、消えた。

ユウとクロは顔を見合わせる。

「最初の呪文のヒントだった！でかしたぞっ、クロ！！」

眩しいほどの笑顔を浮かべたユウは、自分の服の袖でクロの顔を拭く。

「…俺何もしてない。お前の手柄さ。」

まだ少し、眼の赤いクロが複雑な表情を浮かべる。

ただ、何も出来ない自分が悔しくて、子供の様に泣いただけなのだ。

クロは、そんな自分が褒められる覚えなど無い。

「違う、俺たち2人の手柄だよ。前が泣かなきゃ俺はインクのほうに手を伸ばしたりしなかったし、俺が席を立つとき本を閉じていたらあの文字を見つけることが出来なかった。全て偶然だったとしても、俺たち2人がいなければ起きなかった偶然だ。つまり、何もなかったとしても、結果は得られたんだから、ちゃんと自分の手柄なんだ。」

ケイの受け売りだけだな。とユウは付け足して頬を掻く。

そんな優しい言葉が心に染みたのか、クロは再び顔を歪めて泣き出した。

だが、今度の涙は質が違う。

無事にヒントを得られた安堵と自分が目の前の少年を笑顔に変えることが出来た喜びとが入り混じったうれし涙と言っやつだ。

「おい、泣くなよ。泣き虫。眼が溶けてなくなっちまうぞ。」

「だから、泣いてなんか泣いてっ！これは・・・。」

「はいはい、分かっていますとも。氷が溶けてるんだろ？じゃあ、泣き虫じゃなくて無くて溶け虫か。」

ユウの笑みが意地悪なものに変わる。

それを見たクロはムスツとして必死に泣くのを堪えた。

「そう、それでいいんだよ。お前は自分を過小評価しすぎてるんだ。自分って言うものは、自分で思っているよりもずっと影響力があるものだ。」

ユウは軽くクロの頭を撫でてから、再び椅子に座った。

クロが話すのを待たず、ユウは一方的に話す。

「さて、この話はここまで！それより、さっきの暗号についてどう思う？」

「…紅き滴って言ったら血液のことだろ？…バンパイアしか無いんじゃないか？」

「そう、バンパイアだ。でも、バンパイアって言ったら今はもうアイブに睨まれて、人間の血液は全く吸えないから、絶滅寸前まで追い込まれている。何処に生息しているのか分からないくらいだ。お前はあいつ等の生活場所を知っているか？」

ユウは背もたれにもたれ、手と足を無造作に組む。

「知らない…。なんせ、最後にバンパイアを見たのは1200ほど前だ。その時は、とある山の中に固まって住んでいたが、もうあそこにいるわけは無いだろうな。」

クロはやつといつもの顔に戻ってきた。

ユウは滅多なことで自分のペースを乱したりはしないのだが、どうも老若男女問わず人の涙というものにはめっぽう弱いらしい。

クロが泣き止んでくれて、心底安心している。

「そうか。でもこっちは最初とは違って、宛が沢山ある。何を隠そう俺たちは魔物を取り締まってるアイブだ。図書館に行くなり、誰かに聞くなりどうにでもなる。」

「まあ、そういう事だな。」

クロがやんちゃ坊主の不敵な笑みを浮かべ、ユウも微笑み返す。

そのとき、何の前触れも無く扉が開き、1人の少年が部屋に入ってきた。

げっそりとやつれて、目の下に濃い隈を刻んではいるが、相棒のケイだ。

「た、ただいま…。ひとまず何か食い物くれないか…?」

酷い表情をしたケイはこの部屋を出る前よりも10は老けて見える。

ユウが卓上にあつたパンを差し出すと、ケイはそれを引つたくり、一週間何も食べていないかのような勢いでがつつく。

他にも牛乳、クッキー、シリアル、ベーコン、サラダなど等…本当に普通の人が一週間で食べる量をケイはぺろりと平らげてしまった。

「いやあ。イクジステンスブルフ存在証明はどうか使えるようにはなつたけど、酷い目にあつた…。2人とも、何があつたかは聞かないでくれ…。」

これは用済みだ。言つてユウは机の上にイクジステンスブルフ存在証明の本をほり出した。

「ああ…。」

きつと聞くだけで気分が悪くなるようなことに違いないと思つたユウは最初から聞こうとも思つていなかった。

「それでさ、ゼルが帰り際の俺に何を言つたと思う？『また新作できたらよなあ』。』だつてさっ！？全く、あいつの実験に付き合うためにはバンパイアにでもなつて、もつと丈夫にならなきゃ体がいくつあつても足りやしない！！！」

いつ話を切り出そうかタイミングを計つていた2人は思わず噴出してしまった。

なぜこんなに上手くバンパイアの話がでるんだ。

ケイは大声で笑つ2人を見比べたが、全く意味が分からず、首を傾げるばかりだつた。

第18話 待ち猫

第18話 待ち猫

「バンパイアかあ……」

ユウとクロからあらかたの事情を聞いたケイは腕を組んで唸った。だが次の瞬間、落ち着いた話し合いの空気が台無しになる様な凄い勢いで、ケイはユウに顔を近づけ、怒鳴りつける様に質問した。

ケイの行動のせいで、卓上のお茶がティーカップの中で波を打っている。

「てか、バンパイアって本当にいたのかよっ！？そんな面白そうなことなんで俺に教えてくれなかつたんだよ！」

ユウはそんな相棒を見て顔をしかめた。

ケイがユウに顔近づけてけて話したため、相棒の唾が散って来たらしい。

ケイの顔を片手でグツと乱雑に押しつけ、ユウは人生最悪の日を迎えたような不機嫌面で答える。

「そんなこと何で一々お前に教えてやらなきゃいけないんだっ？だいたい、俺自身バンパイアに会ったことは無いんだから、話題に上ることなんて無かつたら！！それとも何か？」バンパイアって本当にいるんですか？』とでもいつも顔に書いてるつもりだったのか。

悪いなあ、全く気づかなかつたよ。このクソボケの大間拔野郎つ！
！」

ユウの毒舌にクロは思わず吹き出す。

ケイは何か言い返したいところだが、言い返す言葉も見当たらないし、この恐ろしく不機嫌な相棒に対抗する勇氣も体力も無い。

従って今回は大人しく引くことにした。

「ははは…仰るとおりで」

「…お前、物分りが良くなるのはいいけど、すごい気持ち悪い。止めたほうがいいぞ」

「同感ー」

「なっ、気持ち悪っ…。お前ら2人揃って俺のピュアなハートを踏みにじりやがって！今、俺の心は海より深く傷ついたぞ！」

「じゃあ、ケイの心は地球よりも厚みがあるわけだ」

クロは天使のような可愛らしい笑みを浮かべた。

勿論、どう見ても確信犯である。

二人の集中攻撃を受け、分の悪くなったケイは行動に出た。

「ああ…母さん、俺生まれて初めて真剣に人（龍？）に殺意が沸いてきたよ…」

ケイは遠い目をし、クロとユウから視線を逸らした。

そしてその方向に視線を定め、ぶつぶつと聞き取れないような声で独り言を始める。

これは、思い出に浸っているフリをして、この話題から離れようと言うケイの巧みな作戦なのだ。

昨日からユウに殴られることが多いが、普段のユウは余程急ぎの用事が無い限り、ケイを暴力でこちらの世界に連れ戻すことはなく、考えを遮ったりしないので今の状態で殴られることはまず無いとケイは踏んだのだ。

だが、ケイの作った故郷を懐かしむしんみりとした空気はユウの手によって一発で壊され、思ってもいなかった方法でケイは現実に連れ戻されることとなった。

「ケイ」

ユウに話しかけられてるのは分かっているが、ここで答えてしまったら作戦が台無しだ。

ケイはユウを無視して聞き取れない独り言を続ける。

「日本はそっちじゃなくてこっちだぞ」

ユウはケイが向いているのと90度別の方向を指差した。

「ええっ、そうなのか!？」

ケイは思わず口を開いてしまった。

このケイと言う少年は、極度の方向音痴であり、しかも頭も悪いため、相棒に教えてもらわなければ北も南も全く分からないのだ。

そして、そんなケイは部屋で故郷のことを考えるとき、必ずこの方向を向いていたのだ。

そんなケイにユウは馬鹿にしたような笑みを向け、鼻で笑った。

ここで、ケイは自分がユウの作戦にはまったことに気づいた。

「ユウっ、お前…謀りやがったなっ!!」

「お前が拗ねるのが悪い。大体、俺は謀なんてしてないぞ」

ユウは意地悪な笑みに磨きをかける。

ケイにとってはどんなに巧みな作戦でも、ユウには子供だましに過ぎないのだ。

「…じゃあ、やっぱり日本って…」

「だから、そっちじゃなくてこっちだって」

「うんうん」

ユウとクロはやはり90度別の方向を指す。

「嘘だろ…じゃあ、いつも故郷と別の方向を見ていた俺って…ホントに間抜じゃ…」

「今頃自分の間抜さに気づいたか。でも安心しろ。岬でいつも見ている方向はちゃんと合ってるぞ。」

その言葉を聞いたケイの表情はパツと一気に明るくなった。

「本当かつ！？えつと岬はこっちの方向だから…あ、ホントだ」

「単純なヤツだなあ」

「やっぱりお前もそう思うか？あいつ、俺と組んだときからな」

ユウとクロはコソコソ話を交えながら一緒になってケイを見てクスクスと笑う。

「あーもうっ！！この話は水に流してやるから、話を戻そう！」

ケイは頭を抱える。

「水に流してやるって…話を戻したいと思ってるのはケイじゃな」

「黙らっしやいっ！！お前らが何を言おうとも話は戻すからな！」

ケイはクロの言葉をかき消し、2人のほうを指差して宣言した。

クロはユウを見たが、ユウは呆れ顔で首を横に振っている。

ケイは本当に子供のような少年で、こうなったら何を言ってもダメだと言ったことをユウはよく知っていたのだ。

「…ところで、バンパイアの生息地ってどうやって調べるつもりなんだ？」

ケイは机の上のチーズを頬張った。

ゼルのせいでもまだ空腹らしい。

次々と食べ物を口に入れていくケイにクロはただただ驚き、ユウは完全に呆れている。

ユウの呆れている理由は2つあり、1つは本当に都合の良い切り替えの早さで、もう1つはこの食べっぷりである。

確かに今、ケイの顔はハムスターのように頬袋があるように見え、なんとも情け無い姿だ。

「そのことなんだが、お前がやれよ。俺は朝からぶっ続けてコレを読んだんだぞ？休憩したって罰は当たらないだろう。方法は任せ^{イクジステ}るからお前、クロと行って来いよ。あ、ついでにコレとお前の存在^{インスブルフ}証明の本を返しておけよ」

ユウは手元の記憶の書をケイに投げ寄こした。

そのままケイの返事を待たず、自分のベットに倒れこみ、健やかな寝息を立て始めた。

「ケイ…多分ユウは」

「分かってるさ」

ケイがこの一方的な命令に何も言わず、大人しくしていたのにはちやんと理由がある。

ユウが人前に出たくないと言うことはケイにも分かっていた。

人の視線が嫌いなユウの事をケイは自分なりに理解しており、そのことについて何も言わないことがケイの精一杯の優しさだ。

まだあまりユウのことを知らないクロは、そのことについてはなんとなく肌で感じており、そんなことを追求するほど子供でもなかった。

2人は意味も無く、顔を見合わせて静かに微笑み合った。

部屋を後にした2人は、ケイが昨日まで全く縁の無かった巨大な建物…図書館に来ていた。

ここに来た目的は、本を返すことは勿論のこと、ケイの知り合いのある人物たちに会いに来たのだ。

「うわぁ…でかいなあ。アイブも出世したもんだ」

初めてアイブの図書館に入ったクロはその大きさに圧倒され、ただただ天井や周りを見渡している。

まるで初めてテーマパークに来てその大きさに驚いている子供のようだ。

目を大きく見開いているクロを見て、ケイは軽く笑ったが、クロの事をとやかく言えない。

きっと自分自身も昨日こんな顔をしていたのだろうと分かっていたからだ。

「アイブは相変わらず子供ばかりなんだな」

クロは来館者であるアイブたちをじろじろと見る。

『貴方のほうが余程子供だと思っんですが…』

と言うのが一般人の意見だろうが、クロの年齢を知っているケイでさえそう思う。

「アイブは20歳くらいで成長が止まっちゃうからなあ。でも中にはあんなんでも70代のアイブだっているんだぜ？」

ケイはしゃがみ込み、自分の腰までしか背の無いクロと視線を合わせ話す。

「それでも俺に言わせればまだまだ子供。赤ん坊に少し毛が生えた程度だ」

可愛らしい男の子は齒をむき出しにして笑った。

こうすると更に子供らしさが際立つが、話の内容との間に違和感を覚えれずにはいられない。

「なら、お前の言う大人なんてこの天界には一人もないさ」

「確かにアイブには居ないが、他は」

クロは言葉を切った。

向こうから2匹の使い魔が自分たちに近づいてきているのに気づいたのだ。

そっくりな2匹の使い魔は猫のような姿をしており、足は幽霊のように途中で消えている。

真っ直ぐな背筋と手、そして知的な表情がこの2匹がただの猫ではないことを物語っている。

この2匹こそ、ケイとクロの待ち人ならぬ待ち猫なのだ。

「ケイさんじゃないですか。私どもに何か御用ですか？」

眼鏡を掛けた方の使い魔が丁寧に挨拶をした後、その使い魔の弟がケイとユウに椅子を勧めた。

本当に良くできた兄弟である。

図書館と言う上級の知能が高い使い魔しか勤められない場所で仕事

をしているだけはある。

「昨日のことで何か…?」

眼鏡の使い魔はスーツとケイたちの目の前まで来て首をかしげた。

昨日。そう、この2匹に初めて会ったのは本当に昨日なのである。

この図書館の猫兄弟に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4423e/>

アイブ

2010年10月10日04時56分発行